# 魁

# 公刊の賦

第二巻

甲斐新聞社長

小林心雄

# 「魁」＝郷土人物戦記＝第二巻の刊行に寄せて

三重県遺族会会長
衆議院議員
田村　元

「魁」第一巻が刊行されましたときに、序文を求められた私は、戦時下の郷土陸軍部隊の人物戦記でもあります本書の意義に触れ、改めて戦没者に哀悼の意を捧げ、遺家族、傷夷軍人、戦争被災者の皆さまの胸中を偲び、平和への願いを新たに致しました。

今回、「魁」第二巻が刊行されるに際して思いは同じであります。とくに戦後生まれの人たちには、祖父母、父母をはじめ、多くの先輩たちが体験した辛酸を厳然たる歴史のひとこまとして把握し、戦争というものが、いかに美名によって飾られようとも、悲惨かつ冷酷な非人道的行為であることを、本書によって理解されることを願わずにはいられません。

第一巻の記述でも分かることですが、例えば昭和十二年に勃発した日中事変における動員令で、戦場に向かった郷土の一兵士は、愛する婚約者に対し「まあ、この戦争は四年ぐらいで終わるよ。なあに、日本の大勝利さ。僕はきっと元気で凱旋する…」との言葉を残して征ったのですが、実際は死を覚悟しての別れの言葉でした。その年九月には国民精神総動員運動が開始され、マスコミも戦争熱をあおる記事を大きく報道、戦争反対の意志など表明できない風潮が支配的でした。

こうして、決定的な敗北への泥沼に突き進んでいったことは、皆さまご承知の通りであります。真相を知らされず、聖戦を信じて東洋の平和と祖国のために欣然と死地へ赴いたのが、第二次大戦下のおおかたの国民感情でありました。

思えば、あの戦争は米英蘭支による経済的包囲網の中で、止むに止まれぬ忍辱の末の乾坤一擲の戦いだったという説もあります。また、大東亜共栄圏という崇高な使命のもとに繰り広げられた戦いだったという人もいます。そういう思想や理想を信じて戦場に散った人たちを、私たち生き残った者が責める資格のないことは申すまでもありません。本書に登場する郷土の将兵の多くが戦死されており、その最期の状況が華々しく、かつ至誠の軍人精神に貫かれているだけに、痛恨の涙を禁じえません。

本書は戦争肯定の記録でもなく、かといって反戦の記録でもありません。郷土の将兵が、戦いの日々を生きたあるがままの足跡であります。その足跡を知ることで、平和の尊さ、貴重さを汲んでほしいと切に願う次第であります。

# 「魁」第二巻刊行に寄せて

三重県知事
田川亮三

このたび「魁」の第二巻が刊行される運びとなり、その壮挙に対し心からおよろこび申し上げます。

本書は、現在も伊勢新聞紙上に連載されている〝郷土人物戦記〟の第二弾であり、完成までにはあと七巻以上が予想されるほどの一大戦争絵巻物となることは間違いありません。

しかし、戦後四十年余を経て、いまなお戦争犠牲者である中国孤児が、わが三重県関係でも判明しており、郷土部隊の将兵が勇敢に戦った物語を読むにつけ、絵巻物というにはあまりにも痛ましく、ご遺族の方々や、今なお傷病に苦しむ人たちの心中を察すると、痛恨の思いを深くするものであります。

世にいう戦記物は、ともすれば闘争本能の赴くままに、空想的カッコよさに魅せられ、戦争の本質を正しく理解するゆとりを失いがちになります。そうした観念に酔うと、再び誤ちを繰りかえすことになりかねません。

本書は、そうした書物と違って、身近な父や夫、息子さんたちの戦いの軌跡を赤裸々にたどり、冷徹な観察眼による論評を加味して誠実な郷土の人物戦記に仕上げてあります。

まさに戦いに倒れられた人たちへの心からなる鎮魂歌であり、次代への警告の書となっています。県民各層のご愛読を祈念してやみません。

# 目次

「魁」第二巻の刊行に寄せて
「魁」第二巻発刊にあたって
第一章　中国戦線の情勢……六
第二章　華北戡定作戦……四〇
第三章　台児庄方面作戦……六八
第四章　徐州作戦……一〇一
第五章　徐州作戦の経過概要……一一七
第六章　徐州は蔣介石の最後の拠点……一四四

第七章　中国軍洪水戦術……二三五
第八章　武漢攻略戦……二四八
第九章　悪戦苦闘の大別山……二五七
第十章　漢口入城……四三二
第十一章　騎兵砲兵航空兵輜重の活躍……四五三
第十二章　徐州会戦から武漢三鎮占領の概観……五三五

# 「魁」第二巻発刊にあたって

伊勢新聞社社長
小林正雄

郷土部隊の徐州から武漢攻略戦までの苦闘をおさめました。ここにいささかの所感を述べさせて戴けることを、大変な幸せであると感謝しております。

お体の立派な御年配の方と行きずりの道端でお逢いする、電車の中で隣り合せになる、とまず、「御苦労さんでした。」心のどこかから、「感謝の心」が湧き出してきます。

それは、あの苦しかった戦場をこの方達も耐え抜いて来て下さったのである、あの惨烈な戦闘を戦い抜いて来て下さった方々である、と、それは必ずといってもよい位間違っていないのです。

寄りそうように、支えるようにある伴侶の方には、よくぞ育んで下さった、苦しいこともあっただろう、悲しいこともあったでしょう、屈辱に耐え難きこともあったでしょうに、よくぞここまで耐え忍んで来て下さった、とその姿が遠くにあっても、そっとてのひらは合せられてくるのです。それが奥さんであるのか、お子達であるのかを問わず、鮮烈であるのです。なおも気懸りなのは、あのとき「後を頼むぞ」と言い残していった戦友たちの遺児だった方々であるのです。

どうしていらっしゃるだろう、目の届く限りは、力の限りは、約束通りお世話出来ただろうか、その言

葉に偽りはなかったかと、自らを省みて恥ずかしい思いを致しています。私の父は、兄は、戦死しましたという、その言葉に耐え難い責が負わされてくることから逃がれることは出来ません。

時代が変わったのだ、戦争は終わったのだと、自らを諦め、自らをこのような方向に迎合させようと努めるが、血潮のたぎる青春に人生の究極は、と信じて疑うことのなかった正義人道の、これこそ禎かんである、真理であると求めた大義名分は、ゆるぎないものであるからです。

曲学阿世（曲学をもって世俗におもねり人気に投ずる）は巷に満ちあふれていますが、これを究むる程に、求むる程に、大義の深奥を知った喜びを新たにするのです。

あのころもなりわいのある悠久の古からの歴史のある祖国の礎石になれるのだ、この民族の柱石になるのだ、私の魂魄が、これこそ人の生きる目的ではなかったのだろうか、と問い尋ね続けたことは間違いでなかったと考えています。

ここで特にお願いして、在天の英霊に申したきことは、貴公らの死は無駄でなかったのだ、決して粗末にはしていないのだ、東洋平和のためならば、何で命が惜しかろうと、共に歌った軍歌は、見よ、「今日の平和と祖国の繁栄を、この現実をせめて凝視してくれ。そして瞑せよ。」と、再び追慕するのであります。悠久の大義に生き、民族の主柱となられた、この先輩に満腔の感謝の誠を捧げずにはおられないのです。

このように戦争を語ることは、軍国主義に連なり、封建的であり、反動思想、右翼であるという極端な偏見が未だに充ちているようでありますが、私は敢て戦争を語り、忘れられんとする尊い国の柱を守り、遺家族の方々を護り抜かねばならぬと考えているものです。日本精神の高揚を願って、次の時代を背負っ

て立つ人々が、高らかに謳う平和日本、道義日本を築き上げてくれることを願うところから、この編を進めているのです。それは私が日本人であり、戦後に生きる者の責務であると信ずるからであります。

また、今次の大東亜戦争が、

一、なぜ起こったか（第一巻収録）

二、兵士はどのように戦ったか

三、兵が神風突撃出来たのは

四、戦争の終結は

五、尊い犠牲の上に築かれた平和

の真実を書き綴って、これを子孫への遺書としたい願いからです。

戦後の日本を弱体化させ、再び強国に発展させてはならぬという目的から連合軍側は、あらゆる煽動を言い、遂には日本人の生活の精神的根拠をも抹殺せんとして、総ての地位を追い落としたのでありました。そうであったから、真実が誤り伝えられており、事実が偏り伝えられているのです。

これは生きた証人がおり、健在であるから、許し難いことで放置出来ぬことであると共に、恥辱と言えばこれに過ぐるものはありません。

これを正したい、真実を聞いて戴きたい、それこそ生きた証人が健在なうちに登場願い、語って戴きたい、と編集してきたものであります。

歴史は下積みの民衆によって綴られて来たという人もあります。指導者は、これら民衆の犠牲の上に立

って、「私欲の為に戦いを挑み、戦争に訴えてきたのだ。」と高言して憚らず、日本民族の裏道のみを綴り合せ、己を徒に卑下せんとしている人々もいます。果たしてそうだろうか。私はなぜ表通りを歩まぬのだ、下積みの民衆のみで産業が、企業が、事業が、発展して来たであろうか、と訴えたい。その産業発展の陰には常に血の滲み出るような奮闘努力を耐えて来た指導者、経営者が必ずいたことを忘れてはならぬ。そして、なぜその指導者に民衆が協力したか。また、生死をかけた戦いにも、欣然参加出来たか。指導者の物質的私欲のみでは決して大衆は、ついてきません。日常に於ても人を動かす人徳があった、また戦いへの大義名分があったのです。この事実をたどって行くことが歴史ではないでしょうか。

親を失くした子は、どのような心で親を探し求めるのだろう。万里波涛を超えても、であります。親が知りたい、祖先を知りたい、その心が祖先を崇ぶ心に至るのであります。これは、我が子に寄せる愛情で、人の常であります。その親が歩んで来た軌跡を尋ね、祖先の生業（なりわい）を求めることが歴史を尋ねることであり、この歴史から、より新しき未来への発展を学び創られて行くのであります。歴史のない国民は遊牧民の如く、足のないまま右往左往する幽霊に等しいのです。

幸い、我国には祖先の残していってくれた、世界にも類のない、尊い立派な歴史があります。これが私たちの行先を示してくれる物指となっているのです。

このように歴史をたどっていき、調べてみると、帝国主義にもならず、より新しい近代国家を作り上げて来た、特に明治維新前後など、ひやりとするような失敗や愚劣なことを再々重ねています。

それなのに、より新しく発展してきたのはなぜだったのでしょう。

それは何時の時代に於ても、歴史の教えを守り、究め、体得し、これを鑑みとして事に臨み、そこから新しい時代にふさわしい道を求めて来たからであります。

東西、両陣営を含め、世界の昨今、暗雲が動き出して来ましたから、妖しくなってきたことは確かであります。だから再び渦中に入ってはならぬことは言うまでもありませんが、独立独歩、如何なる困難、脅威、脅迫にも厳然として立つ、物心両面の備えこそ、万々緊急肝要なことであろうと考え、願うのです。煽動によって亡失した国家観を蘇らせ、民族意識の上に立つ、それこそ日本人本来の姿に立ち還ることこそ、第一等の備えであると考えるのです。

東西両陣営、そのどちらの一方に偏ってもならぬ、どちら側にいても惨禍は同じであります。日本全国を針の山にすべきでしょう。心の針の山、両陣営共、一歩たりとも入り込む隙のない心の、精神の要塞、これを以て備えねばならぬと思います。

そこまではいかぬも今、日本人は間違っているようだ、こんなことではいけないのではないか、日本はこれでよいのか、と日本が今置かれている状態を反省、自覚するように日本人がなって来ました。そして、日本人が本然の姿に戻りつつあります。この波は、今大きな渦となって来ました。これが常に難局に処して来た日本人の姿なのです。正に不死鳥のように日本人が日本の真姿を見直して、日本人を取り戻して来ました。

私はこんな考えで本書を編集し、一人でも多くの方々が披見下さることを願っているのです。それは、わが日本と我々の郷土を平和に繁栄させ、発展させていく最も身近な道であると信ずるからであります。

# 第一章　中国戦線の情勢

## 一　軍の情勢判断と作戦計画

南京の占領をもって和平は成る、戦争は終るであろうとは軍官民共に願い、かつ期待したところであった。だから前線の兵士もこれが最後の攻撃だと勇奮死闘を繰り返して、紫金山を占領し、光華門に、中華門にあの激しい攻撃を加えて南京を占領し有利な和平を願ったのである。

しかるにその和平交渉が徒に遷延し、進捗しない原因が中国側主戦派蔣介石及びこれを鞭撻(べんたつ)していた共産党勢力とアメリカにあったことを日本政府及び大本営は一部の者を除いて深く解していなかった。為に交渉は決裂状態に陥り、前線部隊の将士の士気の維持を配慮せざるに至ったのである。

軍は「支那事変処理根本方針」が御前会議において決定され、政府方針となり、昭和十二年十一月二十日設置された大本営の統帥権を以て作戦指導がなされて行ったのである。中国の内部、特に蔣介石を初めとする主戦派は徹底抗戦を唱え、我が政府から要望した停戦内容にも回答らしい回答を送ることがなかったのでついに我方は昭和十三年一月十六日、いわゆる「爾後国民政府を相手とせず」の声明となった。こ

のことについての経緯は第一巻において詳述してきたところである。

陸軍の中央部、特に参謀本部は、事変当初から不拡大方針の堅持に努め、早期解決の方策を講じて来たことも既に述べてきたところではあるが、南京陥落後の情勢は、いよいよ長期持久戦を覚悟しなければならなくなった。

それは対ソ連よりの攻勢に対応する準備が依然としてゆるがせに出来ない、憂慮される状況にあって中国方面に増兵することは危険と考えられていた。参謀本部としては、政府は強気のことを言っているが、どのようにして事変を処理しようとするのか疑念もあった。かかる情勢の下、軍としては、徹底した持久、すなわち持久戦に処する大規模な計画を樹立して本当の持久戦に取りかかろうというのである。

昭和十三年一月十八日、橋本群少将（前北支派遣第一軍参謀長）の参謀本部第一部長着任（下村定少将が病気のため）とともに第一部は活発な研究を開始した。（参謀本部作戦部）二月十一日、陸軍省部の会議において、河辺虎四郎作戦課長は陸軍省側に、課長の意見として次のことを要求している。

㈠　支那事変の長期持久化、国際情勢、特にソ連と中国の提携の動向にかんがみ軍備の画期的充実を急成する要がある。（魁第一巻の序言参照乞う）

㈡　昭和十五年までに常設二十五個師団（三単位七個師団、四単位十八個師団）を整備し、ほかに臨時編成十個師団、特設十四個師団の準備を完成する。

㈢　以上の合計は四十九個師団であるが、これだけでは不十分であり、十五年度までに四単位六十個師団の完成を熱望する。

（三単位とは歩兵連隊三個連隊、四単位とは歩兵連隊四個連隊編成をいう）

陸軍省側は右の要求に対し、時局に応じこの程度の兵備は必要であるが、問題はこれに耐えうる国力、経済力、科学技術力及び幹部の数などが至急に要求されるものであるが故にはなはだ困難であるが、これが事変解決の骨幹をなすものであるから、万難を排して実現するよう、今後の検討課題とした。

軍は多年、軍需生産の拡充を念願し、国家総動員法の成立に努力してきた。昭和十二年末からの第七十三通常議会において、多くの論議がつくされた。国家総動員法が昭和十三年三月二十四日に両院を通過し、同法は四月一日公布され、五月五日施行となった。なお、本議会において総額八十億を超える大予算（うち臨時軍事費四十八億円）が成立した。

かかる内外の状勢の下における昭和十三年初頭の参謀本部の主流的な考えは、現地作戦部隊の態勢を整理し、陸軍部隊の新編成を実施して、じっくり腰を落ち着けて全面的な持久戦を行う方向であり、陸軍省も大体同意であった。このため、参謀本部は、まず新設六個師団を当年七月までに編成すること、そしてこれら兵団が編成される七月までは、絶対に新作戦は実施せず、態勢を固めるのを原則とし、兵団の整備と軍紀の振作を図るという方針を立てた。徹底的積極作戦を進めて一挙に事変解決を図るのは、昭和十四年とする腹案であった。

新設六個師団は、昭和十一年十一月決定の軍備充実計画において、昭和十四年度に編成予定であった三単位師団を、昭和十三年度に繰り上げて編成するもので、第十五・第十七・第二十一・第二十二・第二十三師団は四月四日の軍令陸甲第二十一号により、第二十七師団は六月二十一日の軍令陸甲第三十四号により

編成され、第二十三師団は満州、その他は中国に配置された。

右の決定までには次のような研究が行われた。

一　津浦線に沿って南北をつなぐ作戦（徐州作戦）

現地軍、特に北支那方面軍の強い意見具申があり、梅津陸軍次官からも新興政権の南北合流その他政略的理由から強硬な主張があったが、事変解決という大局の目的を達成する作戦としては規模が小さく、作戦が成功しても該地域の安定確保のためには少なくとも四個師団が必要と判断されるので、断念された。

二　黄河南岸の鄭州、開封方面に足場を作る作戦

将来の漢口作戦の含みをもって北支那方面軍が強く要望したが、黄河以北、特に山西省の治安確保に相当の兵力を必要とするので採択されなかった。

三　広東攻略その他南支沿岸の作戦

参謀本部内で問題となったが、海軍側に早急に実施する意向がないので取りやめとなった。

四　漢口に威力を及ぼすための方策

海軍側から奥地爆撃用飛行場として使用するため、安慶攻略の希望があり、陸軍省内にもこれを支持する向きがあったが、攻略後において安慶、蕪湖をつなぐため、相当の兵力を必要とするので取りやめとなった。

## 二　陸軍の作戦指導要綱

参謀本部は戦線不拡大方針のもとに、昭和十三年八月を目途とする作戦計画を立案したことは前述の通りであるが、作戦の転機であることと海軍作戦との関係があるので、大本営御前会議で決裁を仰ぐことにした。陸軍としては編成動員、作戦資材、軍需物資の確保など長期にわたる計画を別途研究中であったが、上奏の段階に達していなかった。昭和十三年二月十六日、御前会議で決定された当面の作戦指導要綱（大本営陸軍部作成）は次のとおりである。

## 三　支那事変帝国陸軍作戦指導要綱

### 第一　方　針

支那ニ於ケル現占拠地域（北支那方面津浦線以西ニ在リテハ黄河ノ線迄ヲ含ム）ヲ確保シ其ノ安定ヲ期スルト共ニ対蘇支二国作戦ノ為軍ノ実質的整備ノ完遂ヲ図リ第三国特ニ蘇国ニ対シ警戒ヲ厳ニス

状況之ヲ許スニ至ル迄右戦面ヲ拡大シ又ハ新方面ニ対シ作戦ヲ行フコトナシ

### 第二　作戦指導要領

一　北支那方面

膠済沿線ノ確保及済南上流黄河左岸ノ線ニ向フ作戦ヲ継続シ爾後概ネ右両限界以北ノ地域ヲ確保安定スル外敵後方ニ対スル航空作戦ヲ続行ス

二　蒙彊方面

現占拠地域ヲ確保シ占拠地域付近ニ対シ現有兵力ヲ以テスル剿匪的作戦ヲ行フノ外遠ク積極的作戦ヲ実施セス

三　済南、浦口鉄道（津浦線）沿線

現在以上ニ作戦面ヲ拡大セス

四　中支那方面

海軍ト協同シテ現占拠地域ヲ確保安定スルノ外敵後方ニ対スル航空作戦ヲ続行ス　情況之ヲ許スニ至ラハ所要ノ航空基地ノ獲得ヲ図ル

五　爾他ノ方面

情況特ニ全般ノ戦備之ヲ許スノ時期ニ於テ所要ノ方面ニ作戦ヲ進ムルコトアリ

第三　兵力ノ整備

別ニ定ム

右の指導要綱は、大本営通報として、第二課長河邊虎四郎大佐（起案者）が二月二十三日から三月上旬にかけて北京（北支那方面軍）、張家口（駐蒙兵団）、新京（関東軍）、龍山（朝鮮軍）を訪れて伝達するとともに、中央の意図を説明した。中支那派遣軍に対しては、上京中の同軍参謀長河邊正三少将（19期）に

直接手交し伝達した。

北支那方面軍司令官寺内壽一大将は中央の意図に対して不満であり、河邊大佐に対して、徐州作戦の必要性などについて意見を述べた。

## 四　戦闘序列の変更、在支各軍の基本任務

支那事変勃発以来は、多数の部隊が動員されて北支、中支方面に派遣された。各部隊の隷属指揮の関係は情勢の変化に応じ逐次変更されて行った。

**中支那派遣軍**　昭和十二年末における中支方面における主要兵団の戦闘序列概要は次のとおりである。

中支那方面軍司令官　陸軍大将　松井石根（9期）

上海派遣軍

上海派遣軍司令官　陸軍中将　鳩彦王（20期）

第三・第九・第十三・第十六・第百一師団、歩兵第十旅団

（注）第十六師団は昭和十三年一月十五日、北支那方面軍戦闘序列に編入された。

第十軍

第十軍司令官　陸軍中将　柳川平助（12期）

第六・第十八・第百十四師団

（注）第百十四師団は昭和十三年二月十日、北支那方面軍戦闘序列に編入された。

第三飛行団

昭和十三年二月十四日、中支那方面軍、上海派遣軍、第十軍の戦闘序列が解かれ、新たに中支那派遣軍戦闘序列が下令された。新戦闘序列の隷属転移は二月十八日正午と定められた。中支那方面軍、上海派遣軍、第十軍の各司令官及び司令部は内地帰還となった。

中支那派遣軍戦闘序列の主要兵団は次のとおりで、軍司令官は二月十八日正午統帥を発動した。

中支那派遣軍司令官　陸軍大将　畑　俊六（12期）

中支那派遣軍司令部

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第三師団 | 師団長 | 陸軍中将 | 藤田　進（16期） |
| 第六師団 | 〃 | 〃 | 稲葉　四郎（18期） |
| 第九師団 | 〃 | 〃 | 吉住　良輔（17期） |
| 第十三師団 | 〃 | 〃 | 荻洲　立兵（17期） |
| 第十八師団 | 〃 | 〃 | 牛島　貞雄（12期） |
| 第百一師団 | 〃 | 〃 | 伊東　政喜（14期） |
| 歩兵第十旅団 | 旅団長 | 陸軍少将 | 天谷直次郎（21期） |
| 第三飛行団 | 団長 | 〃 | 値賀　忠治（19期） |

二月二十二日波田支隊（長　波田重一少将―18期）が中支那派遣軍戦闘序列に編入され、二月二十六

日歩兵第十旅団が中支那派遣軍戦闘序列から除去されて、第十一師団長の隷下に復帰した。

中支那派遣軍戦闘序列下令と同日、左記大陸命によって任務が下令された。

**大陸命第五十九号抜粋**（昭一三・二・一四）

一　中支那派遣軍司令官ハ海軍ト協同シテ概ネ杭州、甯〔寧〕国（宣城）、蕪湖ヲ含ム以北揚子江右岸地域内諸要地ノ確保安定ニ任スルト共ニ航空部隊ヲ以テ右地域外敵国内要地ノ攻撃ヲ続行スルヘシ

**大陸指第五十九号抜粋**（昭一三・二・一四）

一　中支那派遣軍司令官ハ揚子江右岸地区内諸要地ノ確保安定ノ任務達成ノ為揚子江左岸地区ニ於テ要地ヲ占領スルコトヲ得

二　中支那派遣軍ハ支那方面艦隊ト協同作戦スルモノトス

其作戦ニ関シテハ中支那派遣軍司令官支那方面艦隊司令長官ト直接協定スヘシ　但航空ニ関シテハ別紙「陸海軍航空協定」ニ準拠スヘシ

**大陸指第五十九号別紙**

**陸海軍航空協定**（昭和十三年二月改定）

一　北支方面ノ航空作戦ハ主トシテ陸軍之ニ任ス

二　南支方面ノ航空作戦ハ主トシテ海軍之ニ任ス

三　中支方面

1　敵空軍ノ覆滅ハ陸海軍協同之ニ任ス

2　陸海軍各自ノ作戦ニ直接必要ナル航空作戦ハ夫々陸海軍航空部隊之ニ任ス

3　当分ノ間左ノ兵力ヲ予定スルモ状況ニ依リ変更スルコトアルヘシ

陸軍　偵察二中隊（十八機）、戦闘三中隊（三十六機）、爆撃二中隊（十五機）

海軍　艦上戦闘機三隊（三十六機）、艦上攻撃機一隊（十二機）、中型攻撃機二隊（二十四機）

中支那派遣軍司令部発足時の陣容の概要は、次のとおりである。

軍司令官　畑　俊六大将　　参謀長　河邊正三少将（19期）

参謀副長　武藤　章大佐（25期）

第一課参課（作戦）

大坪　一馬中佐（30期）　公平　匡武中佐（31期）

光成　省三中佐（31期）　池谷半二郎少佐（33期）

山崎　正男少佐（33期）

第二課参謀（情報）

高橋　坦大佐（27期）　櫻井鐐三中佐（30期）

本郷　忠夫中佐（32期）　中山寧人少佐（33期）

御厨　正幸少佐（33期）　大西　一少佐（36期）

依知川庸次少佐（32期、通信）

第三課参謀（後方）

谷田　勇大佐（27期）　江口　幸平少佐（33期）
二宮　義清少佐（33期）　櫛田正夫少佐（35期）
吉川　猛少佐（35期）

## 五　北支那方面軍

昭和十二年八月三十一日、北支那方面軍、第一軍、第二軍の戦闘序列が下令された。その隷下兵団の概要は次のとおりである。

北支那方面軍司令官
北支那方面軍司令部
第一軍（第六、第十四、第二十師団基幹）
第二軍（第十、第十六、第百八師団基幹）
方面軍直轄（第五・第百九師団、支那駐屯混成旅団）

その後、昭和十二年十月二十日、第十軍戦闘序列下令に伴い、第六師団が同軍に編入されて中支に移動し、同年十月三十日第十六師団が上海派遣軍戦闘序列に編入されて中支に移動した。また、國崎支隊（第五師団の歩兵第九旅団〈歩兵第十一連隊欠〉基幹）が昭和十二年十月二十日第十軍の指揮下に入ったが、同年十二月三十一日第五師団に復帰した。

昭和十三年一月十五日、第十六師団が上海派遣軍から北支那方面軍戦闘序列に編入された。次いで二月十日第百十四師団が第十軍から北支那方面軍戦闘序列に編入され、二月末における北支那方面軍の主要兵団の隷属関係は次のとおりである。

北支那方面軍司令官　陸軍大将　寺内　壽一（11期）

北支那方面軍司令部

第一軍

第一軍司令官　陸軍中将　香月　清司（14期）

第十四師団　師団長　〃　土肥原賢二（16期）

第二十師団　〃　〃　川岸文三郎（15期）

第二軍

第二軍司令官　陸軍中将　西尾　壽造（14期）

第十師団　師団長　〃　磯谷　廉介（16期）

第百八師団　〃　〃　下元　熊彌（15期）

方面軍直轄兵団

第五師団　師団長　陵軍中将　板垣征四郎（16期）

第十六師団　〃　〃　中島今朝吾（15期）

第百九師団　〃　〃　山岡　重厚（15期）

第百十四師団　〃　〃　末松　茂治（14期）
支那駐屯混成旅団　旅団長　〃　山下　奉文（18期）
臨時航空兵団　兵団長　〃　徳川　好敏（15期）

昭和十三年三月十二日、支那駐屯兵団（支那駐屯混成旅団改編）、独立混成第三・第四・第五旅団（新設）が北支那方面軍戦闘序列に編入された。次いで三月三十日、北支那方面軍、第一軍、第二軍の戦闘序列改定、臨時航空兵団の編成改定が下令された。これによって北支那方面軍の隷属関係は次のとおりとなった。

第　一　軍　第十四、第二十、第百八、第百九師団基幹
第　二　軍　第五、第十師団基幹
方面軍直轄　第十六・第百十四師団、支那駐屯兵団、独立混成第三～第五旅団
臨時航空兵団

昭和十三年三月十日、北支那方面軍に左記のごとく新任務が下令された。

**大陸命第七十五号抜粋**（昭一三・三・一〇）

一　北支那方面軍司令官ハ膠済沿線及済南ヨリ上流黄河左岸ニ亙ル現占拠地域ノ確保安定ニ任スル外航空部隊ヲ以テ敵国内要地ノ攻撃ヲ続行シ且諸隊ノ戦力ノ充実ニ努ムヘシ

右の命令が下令されたころ、第二軍は第十師団をもって大運河以東（以北）の敵に対し、撃攘作戦を指導しつつあって、大本営の意図を逸脱するものがあった。これに基因して徐州会戦が生起するに至ったものと考えられる。

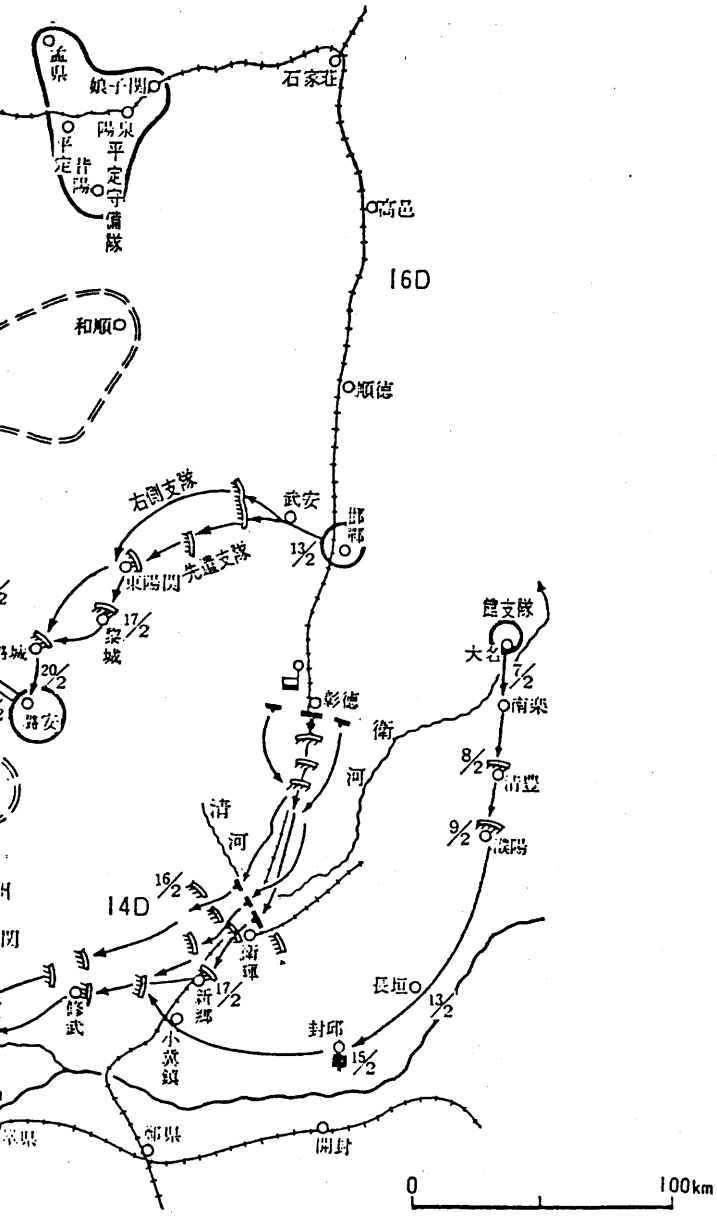
## 六　北支方面の概況

北支方面においては、閻錫山の指揮する第二戦区の部隊約二七個師が太原作戦後（昭和十二年十一月末）、山西省南部に後退し、程潜の指揮する第一戦区の部隊約三六個師の大部は、宋哲元軍の敗退後、黄河南岸に後退したが、有力な一部はなお新郷平地にとどまっていた。この両方面の敵部隊は、陣地を構築し、交通を破壊して、わが進攻を阻止するに努めていた。

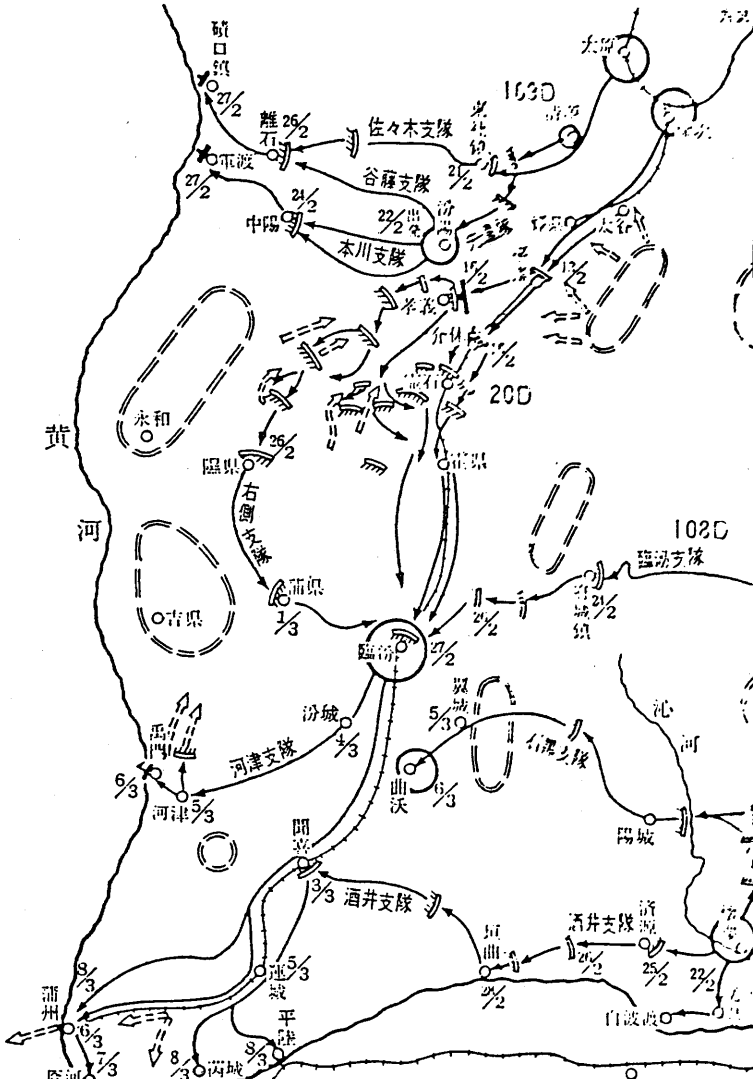
また、李宗仁の指揮する第五戦区の部隊は、昭和十三年二月ころ、津浦線方面において、わが第二軍に攻勢を企図しているもののようであった。なお、共産軍は山西省内の五臺（太原北東百十キロ）、楡社（太原南東百キロ）、静楽（太原北西八十キロ）付近の山岳地帯に蟠踞して日本軍の側背に対し、遊撃戦を実施していた。

**第一軍の戡定作戦**（挿図1参照）　北支那方面軍（以下単に「方面軍」と略称することがある）は昭和十三年一月十日、第一軍に対し「作戦準備の完整に伴い京漢線方面黄河左岸（北岸）地域及び南部山西省の戡定作戦を推進するとともに占拠地域の安定確保に任ずべき」を、臨時航空兵団に対し「右作戦の開始に伴い、一部をもって第二軍に、主力をもって第一軍に協力し、かつ機を求めて隴海沿線の敵航空勢力を覆滅すべき」を命じた。

当時、第一軍（隷下第十四・第二十師団、配属第百八・第百九師団）は軍司令部を石家荘（庄）に、第


孟県
娘子関
石家莊
陽泉
平定
平定守備隊
高邑
16D
和順
順德
右翼支隊
武安
邯鄲
13/2
先遣支隊
東陽関
17/2
梁城
20/2
磁安
彰德
衛
河
清
河
16/2
14D
衛輝
新鄉
17/2
修武
小冀鎮
長垣
13/2
封邱
15/2
開封
0
100km

## 図1　第一軍華北戡定作戦経過要図
（昭和十三年二月上旬～三月上旬）



二十師団を楡次（太原南東）付近、第百九師団を太原以北の同蒲線沿線地区、第十四師団を睢県（彰徳北方三十キロ）付近、第百八師団を順徳付近に配置して次期作戦を準備中であった。方面軍は一月十五日、新たに方面軍戦闘序列に編入される第十六師団を第一軍に配属することを内示した。

第一軍は、二月中旬から三月上旬にわたり、戡定作戦を実施した。その経過概要は次のとおりである。

第十四師団基幹部隊は二月上旬、大名、彰徳付近から作戦を発起し、所在の敵を撃破しつつ南下し、二月末には垣曲から温県にわたる黄河左岸に進出した。その一部は山西省南部に敵を追撃し、曲沃（三月六日）、芮城及び平陸（ともに三月八日）に進出した。

第十六師団（方面軍は一月二十一日第一軍配属を下令、中島師団長は二月三日石家荘到着）は二月十六日の軍命令により、高邑、彰徳、濮陽、臨清（大名北東八十キロ）地区を警備するとともに、一部（歩兵一個大隊基幹）を新郷に派遣し、軍の左側背の掩護に任じた。

南部山西省の戡定作戦は主として第二十、第百八、第百九師団がこれに任じ、作戦末期には第十四師団の一部も協力した。

第百八師団基幹部隊は二月十三日、邯鄲付近から作戦を発起し、険難を突破し所在の敵を撃破して、二月二十日潞安を占領した。師団は爾後、主力をもって潞安付近を守備し、高品支隊を臨汾に向かい追撃させた。同支隊は二月二十六日臨汾東方約四十キロ付近に進出した。

第二十師団基幹部隊は二月十一日、楡次、太谷付近から作戦を発起し、同蒲線に沿う地区及びその西方地区を南下し、所在の敵を撃破し、あるいは反撃に転じた敵と激戦してこれを撃破し、二月二十八日臨汾

に進出した。次いで南下して三月六日禹門、蒲州に達し、三月七日には潼関対岸の黄河の線に進出した。この間、第十四師団の一部が第二十師団長の指揮下に入って作戦した。

第十四、第二十師団は黄河河岸占領後において、匼河鎮、芮消城、平陸、白波渡、温県付近から、対岸の隴海線を砲撃して中国軍に脅威を与えた。

第百九師団基幹部隊は二月十二日、太原及び清源付近から作戦を発起し、第二十師団の北方地区を西方に向かい進攻し、所在の敵を撃破して二月二十七日には黄河左岸の磧口鎮、軍渡付近に進出した。

第一軍の京漢線方面及び山西省南部の戡定作戦は、敵に大打撃を与えて三月上旬に一段落を告げた。敗退した敵主力は黄河右岸に後退したが、有力な一部は山西省内の山地に残存し、共産軍とともに遊撃戦に転じ、わが占拠地域を攪乱し、その勢威は軽視を許さぬものがあった。

第一軍はこれら残敵の掃討粛清を企図し、三月十日左記命令を下達した。

**第一軍命令**　三月十日午前九時於彰徳戦闘司令所

一　各兵団ノ勇戦ニ依リ敵ハ多大ノ損害ヲ蒙リ其大部ハ黄河以遠ニ遁走セリ　山西省内太原、潞安両平地中間山地、潞安平地北方山地内、五臺付近竝山西、陝西省境付近ニハ尚相当ノ共産軍及敗残部隊アリテ軍ノ後方擾乱ヲ企図シアルモノノ如シ

二　軍ハ既占領地域ヲ確保セントス

三　第二十師団ハ南部山西平地ヲ守備シ且黄河ノ線ヲ警戒スヘシ

四　第十四師団ハ新郷平地ヲ守備シ且黄河ノ線ヲ警備スヘシ

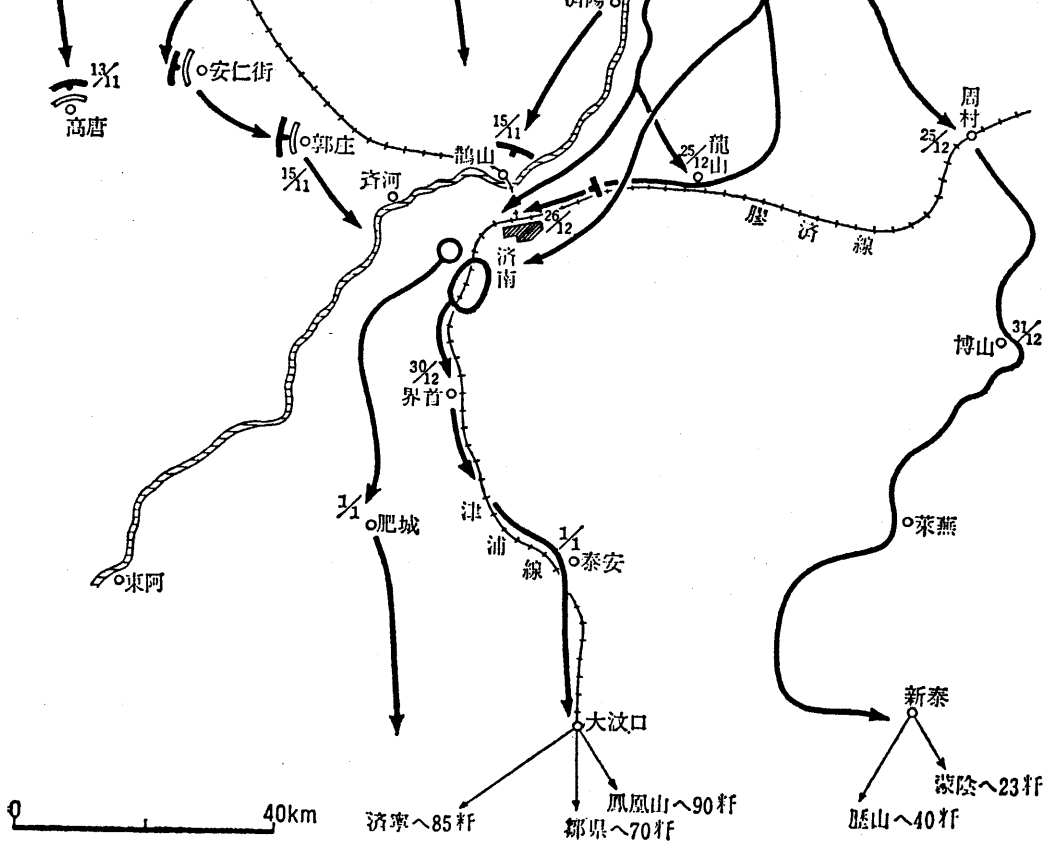
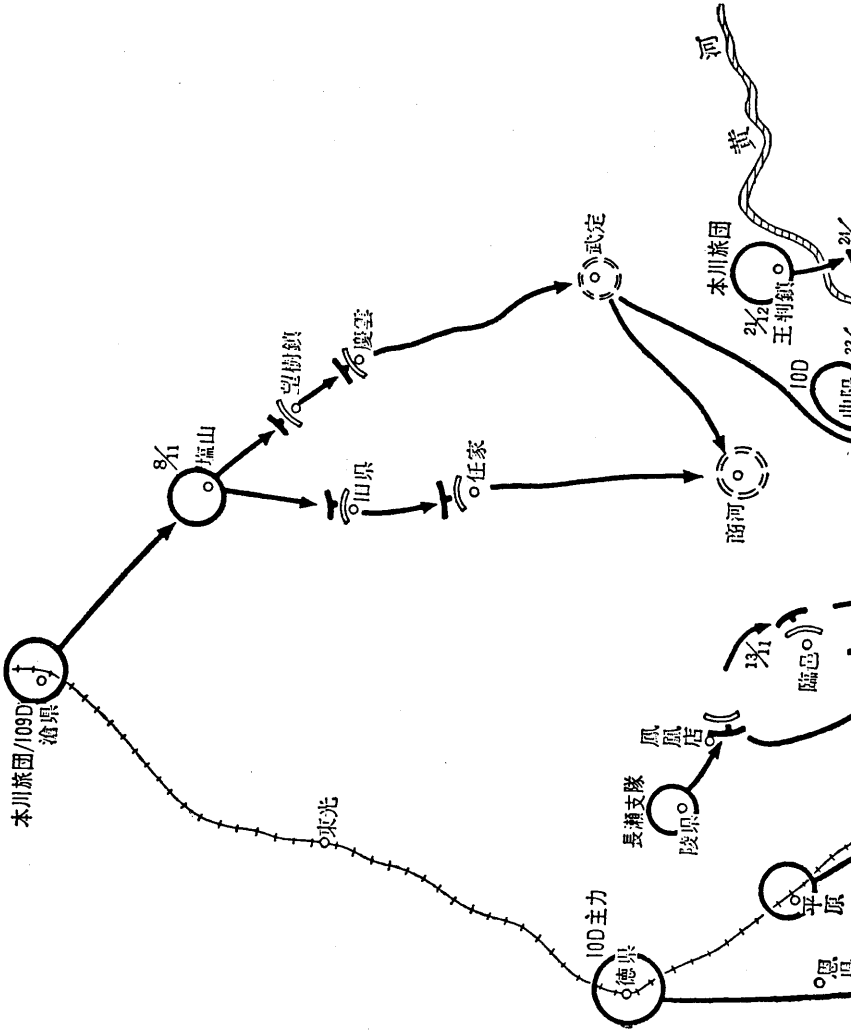

高唐
13/11
安仁街
郭庄
15/11
15/11
鵲山
15/11
龍山
25/12
周村
25/12
濟河
26/12
濟南
膠濟線
博山
31/12
界首
30/12
肥城
1/1
津浦線
泰安
1/1
東阿
萊蕪
新泰
大汶口
蒙陰へ23粁
鳳凰山へ90粁
濟寧へ85粁
鄒県へ70粁
蓮山へ40粁
0
40km

図1

## 図２　黄河渡河作戦経過要図
(昭和十二年十一月上旬～十二月末)



五　第十六師団ハ高邑、彰徳、濮陽、臨清ノ間ヲ守備シ且黄河ノ線ヲ警備スヘシ　将来黄河渡河ノ目的ヲ以テスル渡河点偵察ノ任務故ノ如シ　阜平討伐ノ為方面軍兵站監ニ配属シアル部隊ハ近ク復帰セシム

六　第百九師団ハ太原平地竝離石付近ヲ守備シ且磧口鎮及軍渡付近ノ黄河ノ線ヲ警戒スヘシ

七　第百八師団ハ潞安平地竝陽泉、昔陽付近ヲ守備スヘシ　臨汾ニ残置セル部隊ハ第二十師団後方警備完了後帰還セシムヘシ　其時機ニ関シテハ第二十師団ト協定スヘシ　軍兵站監ニ配属シアル部隊ノ復帰ニ関シテハ別命ス

八　作戦地境ハ左ノ如シ〔略〕

九　各師団ハ作戦地域内ノ安定ニ任シ且鉄道、通信及兵站施設竝飛行場ヲ警備スヘシ　本次作戦後成ル可ク速ニ別紙計画〔略〕ニ基キ共産軍及敗残部隊ヲ掃滅スヘシ〔以下略〕

右命令に基づき、各兵団は掃討作戦に移行したが、敵の遊撃戦及び反攻作戦が逐次開始され、徐州会戦時ころには特に活発化するが、後述する。

**第二軍方面の概況**（1712 13）（挿図2参照）　第二軍（隷下第十師団、配属第百九師団の本川旅団、隷下の第百八師団は第一軍に配属）は方面軍命令により、昭和十二年十二月二十三日夜、第十師団及び本川旅団をも黄河の渡河作戦を実施した。

第十師団は十二月二十六日済南を攻略し、敗走する敵を追撃して津浦線に沿う地区を南下し、翌十三年一月四日兗州及び曲阜、六日鄒県、十一日済寧を攻略した。爾後、第十師団は軍命令により追撃し、占拠

地の掃討に任じた。本川旅団は済南東方地区を南下し、一月四日蒙陰を、五日歴山を占領した。

第二軍戦闘司令所は十二月三十日済南に進出し、軍に配属された支那駐屯歩兵第二連隊主力を警備のため、一月一日済南に進出させた。

方面軍はこれより先の十二月二十四日、第二軍に対し、一部をもって青島攻略の準備を命ずるとともに、第五師団の一部（歩兵第十一連隊基幹、「鯉城支隊」と称す）を第二軍に配属した。鯉城支隊は一月十日濰県に進出した。

方面軍は青島攻略のため一月四日、第五師団主力（方面軍予備として保定付近に集結して訓練中）を第二軍に配属し、一月九日青島攻略を命じた。

大本営は十二月三十一日、青島攻略のため、中支那派遣軍に配属中の國崎支隊（第五師団の歩兵第九旅団長國崎少将の指揮する歩兵第四十一連隊基幹）の北支方面軍復帰を命じ、方面軍は一月十四日第五師団復帰を下令した。

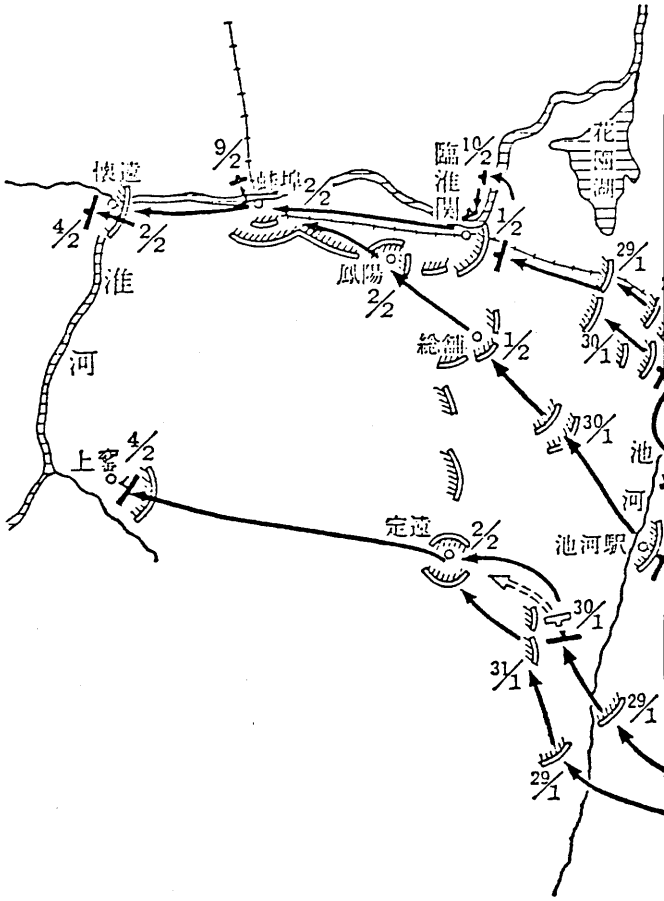
第五師団（一月九日鯉城支隊復帰）は一月十二日から東進を開始し、先行の鯉城支隊主力は一月十九日青島に到着した。第五師団長は前日の十八日青島に進出した。

当初、青島は陸海軍協同で攻略する計画であったが、海軍は一月十日単独で青島を攻略した。國崎支隊は一月十一日上海を出航し、一月十四日青島に上陸して第五師団長の指揮下に復帰し、青島付近の警備に任じた。

方面軍は一月八日、第二軍配属の本川旅団、支那駐屯歩兵第二連隊主力等の原所属復帰を命じた。本川

十七日～二月十日)

**図3　昭和十三年三月ころの全般状況**
**淮河河畔への進出作戦経過要図**（昭和十三年一



旅団は一月二十五日～二十九日済南を出発し、石家荘に至り第百九師団の指揮下に復帰した。

## 七　中支方面の概況（挿図3参照）

中支那方面軍は昭和十二年十二月十三日、南京を攻略し、同月二十四日には杭州も攻略した。爾後、中支那方面軍は、十二月七日の大陸命に基づき担任地域内の主要地の安定確保と次期作戦を準備した。十二月末における中支那方面軍の配置概要は次のとおりである。

第十軍の司令部は杭州に位置し、第十八師団は杭州周辺の、第百十四師団は湖州（杭州北六十キロ）周辺の、第六師団は太平（南京南西三十キロ）、蕪湖、寧（寧）国道に沿う地区の、第一後備歩兵団（歩兵六個大隊）は上海南部地区から松江、嘉興道に沿う地区の、第二後備歩兵団（歩兵六個大隊）は南潯鎮、嘉興、長安（杭州北東四十キロ）、臨平道に沿う地区のそれぞれ警備に任じた。

上海派遣軍の軍司令部は南京に位置し、第十六師団は南京周辺地区の、第三師団は鎮江、丹陽、金壇、常州、江陰、無錫地区の、第九師団は蘇州、常熟、太倉、崑山地区の、第百一師団は上海地区のそれぞれ警備に任じた。揚子江北岸においては第十三師団が滁県、来安、六合、全椒（滁県南西）地区を、天谷支隊（第十一師団の一部）が揚州地区を警備していた。第十六師団の北支那方面軍編入（一月十五日）に伴い、天谷支隊は揚州地区の警備を第三師団と交代し、第十六師団に代わり南京地区の警備に任じた。

第十三師団方面の中国軍は、その主力が蚌埠、臨淮関、鳳陽、定遠付近に所在し、第一線は池河（定遠

南方及び東方）の線において陣地を増強し、昭和十三年一月下旬には、その兵力は一四個師約五万に達し、わが軍に対してしばしば逆襲してきた。

上海派遣軍は一月二十六日、第十三師団に対し鳳陽、蚌埠付近の敵撃滅を命ずるとともに方面軍に報告した。

方面軍は右作戦を是認したが、作戦後は現駐地に帰還するよう指示した。

第十三師団は直ちに作戦を発起し、池河付近の敵陣地を突破して、二月二日までに臨淮関、鳳陽、蚌埠などの淮河南岸地区を占領した。次いで二月四日懐遠、九日小蚌埠、十日臨淮関北岸などの淮河北岸の要地を占領した。

中支那方面軍は第十三師団を滁県付近に復帰させることを考慮していたが、情勢の推移から、この態勢から徐州会戦に移行した。

二月十四日、中支那派遣軍の戦闘序列が下令されたことは既述のとおりである。

中支那派遣軍（以下単に「派遣軍」と略称することがある）は三月六日、「中支方面ヨリ見タル支那ノ一般情勢」をまとめている。当時の派遣軍の観察を知るための好資料であるので、長文ではあるがこれを記述する。

**中支方面ヨリ見タル支那ノ一般情勢**

十三年三月六日　中支那派遣軍司令部

目　次

第一　国際情勢
第二　支那ノ一般政情
第三　戦況
　其一　支那軍全般ノ状況
　其二　北支方面ニ於ケル戦況
　其三　軍当面ノ状況
第四　作戦地ニ於ケル政情

第一　支那ヲ中心トスル国際情勢

支那ヲ中心トスル国際一般ノ情勢ハ独逸ノ満洲国承認、英国外相ノ更迭、国民党共産党間争闘ノ深刻化等ニ依リ逐次我ニ有利ニ展開シ対支援助ノ共同戦破綻ヲ来シツツアリ　最近ニ於ケル列国ノ態度概ネ左ノ如シ

一　英国　従来英国ハ国際連盟ヲ中心トスル集団保障ヲ原則トシ米仏蘇ト提携シテ欧洲列強ノ対極東政策ヲ領導シテ支那ヲ支持シ特ニ極力米蘇両国ノ協力ニ依リ我ヲ牽制セシメ以テ在支権益ノ擁護竝我大陸躍進阻止ニ努メ来レリ　然ルニ今ヤ長期抗戦ノ大勢ハ支那ニ不利ニシテ蔣政権ニ対スル今後ノ積極的支援ハ其効果大ナラサルニ反シ却ツテ英国ノ既得権益ノ衰頽ヲ招来スルノ虞アルニ至リ一方独伊両国ノ対日近接、仏蘇勢力ノ衰頽等欧洲ノ諸情勢ハ従来ノ方策ヲ継続スルヲ不利トスルニ至リシニ鑑ミ茲ニ対外政策ニ修正ヲ加ヘ欧洲ニ於テハ独伊ト近接シテ其安定ヲ策シ極東ニ於テハ支那政権絶対支持

ノ態度ヲ緩和シ自国権益保持第一主義ヲ採ルニ至レリ

二　蘇国　対支積極的援助及対列強策動ニ依リ長期抗戦ヲ支援シ我カ疲弊ヲ待ツテ極東ニ於ケル有利ナル態勢ノ獲得ヲ企図シアリシモ米国ノ徹底セル事変不介入方針及最近英仏ノ対蘇支支援ニ関スル態度微温的トナリタル為蘇連ノミ単独ニ紛争ノ渦中ニ投スルコトヲ極力警戒シ主トシテ新支那共産軍ノ再建西北諸省ニ於ケル蘇連勢力域ノ確立ヲ企図シアルモノノ如シ　而シテ最近ニ於ケル国民党政府ノ共産党ニ対スル一般ノ空気ニハ不満ヲ感シ支那軍ニ対スル蘇国ノ軍需品援助ニ考慮ヲ加ヘ主トシテ中国紅軍各部隊ニ対シテノミ行フヘキヲ予期シアルモノノ如ク又国民党政府ニシテ支那民衆ヲ裏切ルカ如キ態度アル場合ニ於テハ別個ニ赤色新政権樹立ノ準備工作ヲ進ムヘク企図シアルモノノ如シ

三　独逸　従来ノ懸案タル満洲国承認ヲ実現シ防共協定ト相俟ツテ我極東政策ニ貢献シツツアリ　然レ共日支紛争ニ関スル限リ独逸ノ態度ハ伊太利ノ如ク全面的対日支持ニアラス　即チ依然中立ヲ維持シ国民党政府トノ関係ヲモ継続シ以テ支那ニ於ケル権益擁護並経済的発展ヲ企図シアルモノノ如シ

米、伊、仏諸国ノ態度ハ省略ス

要之最近ニ於ケル列国ノ態度ハ支那ノ長期抗戦ノ前途ニ疑念ヲ抱キ国際情勢ハ大局ニ於テ我ニ有利ニ展開シツツアルヲ以テ此際徒ニ外国ヲ刺激シテ情勢ノ逆転ノ因ヲ作ルカ如キハ努メテ之ヲ避クルト共ニ此好機ヲ利用シ戦局ノ進展ヲ期スルヲ有利ナリト観察セラル

## 第二　支那ノ一般政情

現下支那ノ一般政情ハ逐次長期抵抗ニ対スル自信ヲ喪失シ外、列国ノ支援ヲ失ヒ内、各種ノ内政問題

勃発シ今ヤ崩壊ヘノ一途ヲ辿リツツアリ　而モ其内政問題ノ主ナルモノヲ国民党共産党間抗争ノ深刻化、宋一家ノ内争、四川問題及広東問題トス

一　国民党共産党間ノ抗争　蘇軍ハ極東ニ於テ利用シ得ル唯一ノ陸上兵力ニシテ蔣介石ハ当初日支交戦ニ際シテハ蘇軍ノ直接協力ヲ期待シアリシモノノ如ク右ノ計画失敗ニ帰セシモ尚蘇連ヨリ多量ノ人員武器弾薬特ニ空軍増強ノ為援助ヲ必要トセリ　又北支、中支ニ於ケル莫大ナル戦力ノ損耗ハ軍ノ急速ナル再建ヲ必要トシ民衆武装ノ為共産党ノ組織ヲ利用セサルノ已ムナキニ至レリ　是等軍事上ノ要求ハ今ヤ戦争指導ニ熱中シ眼中内政問題ヲ顧ルノ余裕ナキ蔣介石ヲシテ遂ニ国共合作ニ深入セシメ外、英米仏ヲシテ警戒セシメ内、国民党就中藍衣社、CC団ヲ中心トスル国粋党ト共産党間ニ深キ溝ヲ生シ其地下抗争漸次深刻化スルノ実情ニ在リ　而シテ本闘争ハ宋一家分裂ノ因トナリ延テハ抗日統一戦線ノ崩壊ニ迄発展スルノ虞アリ

二　宋一家ノ内争及蔣介石ノ健康問題　蔣介石カ財政経済等ノ内政問題ヲ顧ミス軍事ニ熱中シ且国民党ノ存在ヲ無視シテ共産党トノ合作ヲ深入シアルノ事実ハ宋子文、孔祥熙其他浙江財閥ノ喜ハサル所ニシテ目下之カ善後対策ニ腐心シツツアルカ是等ハ逐次他方面ニモ反映シ蔣介石政権ノ危機ヲ招来セントシツツアリ　蔣近来ノ健康状態ハ益々不良ニシテ腰ニ石膏製「ギブス」ヲ着シ単独歩行モ困難ナルト伝ヘラレ之亦蔣政権ノ前途ニ一抹ノ不安ヲ与ヘツツアリ

三　南支問題　広東ヲ中心トスル南支一円ハ国民党擁護共産党排撃ノ空気濃厚ニシテ蔣ノ容共政策ニ対シ漸次対立的勢力ヲ構成シツツアリ　又上海及主要沿岸線ヲ奪ハレタル蔣ハ財政経済ノ中枢機能ヲ広

東ニ確立セント企画中ナリシカ人事機構等ノ問題ヲ巡リテ広東当局ノ反対ニ逢ヒ両者間円満ヲ欠キツツアリ　又英国ノ所謂広東ヲ中心トスル親共自治政権樹立問題ハ宋子文、孔祥熙泥、呉鐵城、余漢謀其他南支将領ノ支持シツツアル所ナレ共蔣介石ハ之ニ絶対的反対ノ態度ヲ執リツツアルカ如シ

四　四川問題　南京陥落ト共ニ重慶ヲ首都ト決定セル中央政府ハ四川ノ中央化ヲ企図シツツアリシカ偶々劉湘ノ死ニ依リ急速ニ之カ実現ニ努メ張群ヲ省主席トシ劉湘直系軍ノ極端ナル中央化ヲ実施スルニ至レリ　然ルニ従来ヨリ中央化ニ反対セル是等軍閥及以前中央化ノ犠牲トナリシ失業軍人政客ハ極度ニ興奮シ反蔣反中央ノ気分ヲ爆発セシメントスルニ至レリ　茲ニ於テ蔣ハ人望厚キ鄧錫侯ヲ漢口ニ招致シ四川問題ヲ之ニ一任スルニ至レルモノノ如ク中央ノ軟弱妥協的態度ハ従来見サル所ニシテ鼎ノ軽重ヲ問ハレツツアルモノト謂フヘシ

之ヲ要スルニ現下支那一般ノ情勢ハ長期抗戦ノ前途ニ不安ヲ感シ抗日統一戦線崩壊ノ兆アルモノト観察セラレタ

## 第三　戦　況

### 一　支那軍全般ノ状況

#### 一　支那軍ノ再建問題

1　軍ノ整備補充ノ状況　支那軍カ今次事変ニ於テ蒙リタル損害ハ中支方面ノミニテモ四十数万ニシテ北支方面ヲ合スレハ八十万内外ト算定セラル　而テ蔣介石カ多年苦心練成セル中央軍ノ大部ヲ占ムル六十七ケ師ハ当中支方面ニ於テ徹底的打撃ヲ蒙リ戦闘力ノ大部ヲ喪失スルニ至レリ　蔣介石ハ

呉福陣地竝江陰、無錫、湖州ノ陣地線危殆ニ瀕スルヤ速ニ其主力ヲ浙贛及江南鉄道沿線ニ後退シ我南進ヲ拒止シツツ極力態勢ノ挽回竝部隊ノ整備、改編、補充ニ努メツツアルモ其兵員一ケ師平均五千名内外ニシテ就中歩兵重火器竝火砲ニ於テ不足シアリ其戦力ハ平時ノ三分ノ一以下ニ低下シアリト判断セラル〔中略―下級指揮官の不足を述べあり〕

蔣ハ軍ノ急速ナル大量補充、再建設ノ困難ナルニ鑑ミ民衆武装ヲ決意シ長期抗戦、游撃戦法ヲ採用スルニ至リ　而シテ民衆武装ノ為共産党ノ組織ヲ利用シ之カ指導訓練ニ共産党員ヲ参加セシムルニ至ル　湖南、江西両省ニ於テ各々五十万ヲ目標ニ訓練シツツアリト称セラレ広東、広西両省ニ於テモ略々同数ノ民衆ヲ訓練シツツアッタ

2　空軍再建問題　従来ノ支那空軍ハ殆ント其大部ヲ我陸海軍航空隊ノ為撃滅セラレ現在之カ根幹トナリアルハ主トシテ外人ヲ以テ組織シアル部隊ナリ　而テ当時ノ支那空軍ノ主体ヲ形成シアルモノハ左ノ三集団ニ分類シ得ヘシ

其第一ハ蘇連ノ人員機材ヲ以テ編成セルモノニシテ支那空軍ノ主体ヲナシ最モ強力ナル部隊ニシテ「スペイン」戦線ノ歴戦者之カ指導ニ任シアリ　第二ハ米人「チェーリタ」大佐及「シュミット」ノ指導スル米、仏、加、墺人ヨリナル外人部隊ニシテ戦死者等ノ為現在二十名以下ナリ　第三ハ欧米ニ於テ実地教育ヲ受ケタル支那人ヲ以テ編成セルモノテアル

而シテ最近支那軍首脳部ハ蘇連飛行機竝飛行家ノ日本空軍ニ劣リアルコトヲ確認シ在支蘇連空軍ニ対シ失望シ莫斯科（モスコー）目市政府亦之ヲ認メ恐惶ヲ来セリ　漢口ニ於テハ支那空軍再組織問題及外国製

飛行機ノ購入方法ニ関シ検討中ナリシモ結局支那政府ハ飛行機竝操縦士ノ整備ハ全面的ニ「蘇連邦」ニ依存スヘク其大量ノ輸入ニヨリ空軍再建設ヲ企図シツツアッタ

二　支那軍全般ノ状況

支那軍ノ配置　目下蔣介石カ第一線ニ使用シアル兵力ハ百二十個師ナリ　而テ全戦場ヲ五戦区ニ分ケ各方面ノ指揮ハ主トシテ各戦区総司令長官ニ担任セシメ自ラハ其行営ヲ京漢ノ信陽ニ進メ全般ノ指揮ニ任シアリ　各戦区ノ区分総司令長官竝各戦区ニ配当セル兵力、素質別紙要図〔略〕ノ如シ　而シテ中央軍ノ主力ハ浙赣、江南鉄道沿線及黄河南岸京漢線地区ニ配置セラレ津浦線方面ニハ主トシテ広西、四川、山東、東北ノ地方軍ヲ配備セラレアリ

二　北支方面ニ於ケル戦況

〔中略―北支方面日本軍全般状況〕

一　山東方面ノ戦況

1　磯谷部隊〔第十師団〕〔略〕

2　板垣部隊〔第五師団〕〔略〕

3　山東自治連軍　北支方面ノ特別謀略隊タル山東自治連軍（歩兵二個師、独立旅二個）ハ目下日照付近ニ進出シアリ

4　山東方面ノ敵情　第三集団軍敗退スルヤ第五戦区司令長官李宗仁ハ固鎮、蒙城方面ニ南下中ナリシ張自忠ノ第五十九軍ヲ徐州北方ニ招致シ鄧錫候ノ指揮下ニ入レ第二十二集団ヲシテ津浦線及其以

西地区ヨリ攻勢ヲ採ラシメ戦勢ノ挽回ヲ企図シアリ

二　京漢及同蒲鉄道沿線方面

〔中略―日本軍全般状況〕

1　土肥原部隊〔第十四師団〕〔略〕

2　下元部隊〔第百八師団〕〔略〕

3　川岸部隊〔第二十師団〕〔略〕

4　山岡部隊〔第百九師団〕〔略〕

5　後宮部隊〔第二十六師団〕〔略〕

6　京漢、同蒲線方面ノ敵情　京漢線方面約十万ノ敵ハ殆ト潰滅シ敗兵ハ黄河以南及西方、北方山地内ニ潰走セリ武安及林県付近約二万ノ敵ハ我ニ帰順ヲ申出テアリ　山西方面約二十万ノ敵ハ徹底的打撃ヲ受ケ黄河以南ニ潰走中ニシテ一部ハ臨汾西方山地ニ遁走セリ　又楡社及武郷付近ニアル第三軍及第八路軍ノ一部ハ既ニ退路ヲ遮断セラレ山地内ニ蟠踞シアリ

三　軍〔中支那派遣軍〕当面ノ状況

荻洲部隊〔第十三師団〕ノ一月二十八日ヨリスル淮河河畔ニ向カフ北上作戦ハ第二軍ノ山東作戦ニ策応シ敵ニ多大ノ衝撃ヲ与ヘタルモノノ如ク蔣介石ハ隴海線沿線確保ノタメ二月三日先ツ第三戦区総司令長官顧祝同ニ対シ日本軍ノ背後ニ向ヒ攻勢ヲ命シ次テ第五戦区司令長官李宗仁ニ対シ北方及南方ニ対スル攻勢ヲ命シ以テ徐州付近ヲ死守セシメ第三戦区方面ヨリ広西軍廖磊ノ第七軍六ケ師ヲ又第一戦区方面

ヨリ張自忠ノ第五十九軍（二ケ師）及湯恩伯ノ第二十五軍団ヲ我カ荻洲部隊正面ニ進中ス　荻洲部隊当面ノ敵ハ目下主力ヲ以テ固鎮、蒙城、寿県、廬州付近ニ停止シ陣地ヲ構築中ニシテ其有力ナル一部ヲ以テ文集、張橋集、上窪対岸ニ游撃拠点ヲ占領シ我側背ニ対スル攪乱ヲ企図シアリ　尚小溪集、五河方面ニハ繆徴流ノ第五十七軍第百十一師ヲ基幹トスル約四千ノ兵匪アリシモ二月二十七日ヨリ三月三日ニ亙ル荻洲部隊ノ討伐ニ依リ五河ヨリ北方ニ退却中ナリ

第三戦区方面ニ於テハ銭塘江両岸地区ノ敵ハ陣地ヲ数線ニ構築シ主要交通路ヲ破壊シ主トシテ防勢ニ立チアリテ小規模ノ游撃戦法ヲ以テ背後攪乱ヲ企図シアルニ過キス　江南鉄道及其両側地区ハ多少纏リタル攻勢ヲ実施スルモ其攻撃力ハ大ナラス　第三戦区ハ最近牛島部隊（第十八師団）ノ実施セル孝豊方面討伐、稲葉部隊（第六師団）ノ実施セル奎潭鎮、紅陽樹、三山鎮討伐ニ依リ概シテ平静ヲ維持シアリ

# 第二章　華北戡定作戦

## せん滅作戦命令出る

――郷土部隊も北支へ進撃――

南京の攻略が終わったら凱旋だ、戦争は終わるのだと現地の将兵も国民も首を長くして会議の結果を待っていたことについては何回も述べてきたところである。

それほど軍民ともに待った会議は、十二月十三日占領、十七日入城式も終え、ドイツ大使を仲介に極秘のうちに進められていたのである。しかし交渉は遅々として進まず、再三再四にわたった国民政府よりの回答期日の延期申し入れにも応じ、その朗報を待ったのであった。遂に一月十五日までの最終期限付回答日にも誠意あるものは得られなかったのである。

このようにして一月十六日、政府は遂に蔣介石は相手にせずという声明を発表したのである。万事休す。

帝国政府は南京攻略後なお支那国民政府の反省に最後の機会を与えるために今日に及べり。然るに国民政府は帝国の真意を解せず、みだりに抗戦を策し、内、民人塗炭の苦しみを察せず外、東亜全局の和平を顧みる所なし。さて帝国政府は爾後国民政府を相手とせず、帝国と真に提携するに足る新興支那政権の成

立発展も期待し、これと両国国交を調整して更生新支那の建設に協力せんとす。もとより帝国が支那の領土及主権並びに在支列国の権益を尊重するの方針には毫もかわるところなし。いまや東亜和平に対する帝国の責任いよいよ重し。政府は国民がこの重大なる任務遂行のため、いっそう発奮を翼望して止まず。

これは御前会議で和戦両様の方策を定めた「支那事変処理根本方針」の「支那現中央政府が和を求め来たらざる場合に於ては帝国は爾後これを相手とする事変解決に期待を掛けず」の項によるものであるが、この声明では「爾後国民政府を相手とせず」と断定的に否認したものであった。

大陸命第八十四號

命令

一大本営ハ徐州附近ノ敵ノ撃破ヲ企圖ス

二北支那方面軍司令官ハ有力ナル一部ヲ以テ徐州附近ノ敵ヲ撃破シ蘭封以東ノ隴海線以北ノ地域ヲ占據スヘシ

三中支那派遣軍司令官ハ一部ヲ以

徐州会戦への大本営命令

これに対し国内の表面的世論は政府のこの声明を英断なりと共鳴したのである。もちろん年末から年始にかけて秘密裏には行われていた日支和平交渉の進展がないことを知った国民に激昂のものがあった。またこの間に日本側の対支態度、特に中・北支における軍事的進展と北支蒙彊において新政権の成立等があり、軍部はもちろん政党、ジャーナリズム、有力国民層とくに右翼団体等の間には、蔣介石の国民政府を相手にしなくても中国側を屈服させることは必ずしも不可能でない、という空気が濃厚に台頭してきたので、講和促進論者は沈黙せざるをえない情勢となっていた。従って前記の政府声明も

一般国民には和平無用論のような印象を与えて迎合されたのである。

しかし、参謀本部主脳、軍の首脳は長期戦に対する戦力の限界を知っていたから和平策に汲々としたのである。一般には軍が戦争を好み、継続を好んだというが如き印象を与えているが、その実は政府世論が先行していたのであった。

こうした中で北支蒙彊に兵力の集中を行い、我派遣軍の分断孤立化を図るべき勢いが熟成されてきたので、遂にここに向け、せん滅作戦命令が発せられ、わが第十六師団も上海派遣軍の戦闘序列から離れ、北支方面軍の戦闘序列に編入され、北支に進撃したのである。

この命令のもと我郷土部隊も北支へ進撃を開始した。

## 犠牲者最小、効果は最大

――佐々木旅団長　円滑な戦闘指導――

### 再び華北へ

第三十旅団司令部書記だった杉田龍太郎さん(七四)＝津市大門一七―一二＝が語る第二十一代旅団長佐々木到一少将の人柄。

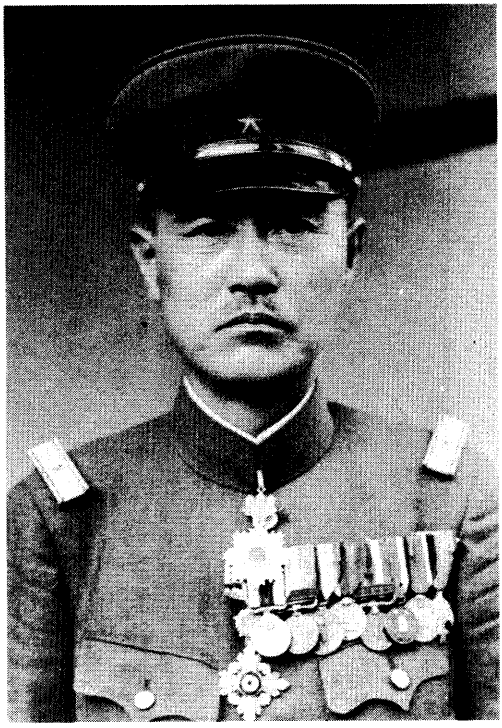
旅団司令部は連隊本部、第一大隊とともに一月二十四日、午後四時南京下関（しゃあかん）から日洋丸（七千トン）に乗船、戦火のあとも生々しい南京、そして激戦を展開した紫金山をあとにながめ、揚子江を下った。上海を右に見て黄海に出た船は「ひょっとしたら内地帰還かも知れんぞ」とよろこぶ兵たちの夢

を破って二十九日には満州の大連港に入った。大連の町は平和を楽しんでいた。夜の繁華街はネオンの洪水だった。民家に合宿した兵たちは半年ぶりにタタミの上で内地の香りを味わったのだった。

杉田書記は町をかけ回った。佐々木旅団長の宿舎探しだった。やっと、大連屈指の土建業者「榊谷屋」の私邸を借りる話がついた。

「閣下、ご案内いたします」

「うん」



佐々木到一旅団長

気軽に腰を上げた旅団長だったが、榊谷屋の玄関までくると「せっかくだが、ご好意だけは受けておこう。ご迷惑をかけてはいかんから、私は辞退する。部下はごやっかいになろうが…」

ていねいに断って、さっさと遼東ホテルに宿をとった。結局、古見副官らと杉田書記らが泊まったわけだが「せめて記念撮影だけは…」と袖を引っぱって榊谷屋の玄関でうつしたのが掲載の写真である。（前列右から二人目杉

田、三人目古見、一人おいて中央が佐々木旅団長）

杉田さんは支那事変中佐々木旅団長のもとで勤めた。佐々木旅団長といえば当時は、土肥原（師団長）とともに〝泣く子もだまる〟と言われた男。支那事変が始まると在中十数年という中国通を買われて第三十旅団長に赴任、野田（第三十三連隊）助川（奈良第三十八連隊）を率いて征途に着いた。

（佐々木旅団長は大正十一年広東駐在武官となり以後孫文と交わり、蔣介石を知った。事変勃発直前まで中国に在勤）

大本営から送ってくる敵の部隊長の力を知りつくしていた。連隊、大隊長を集めて、自ら地図を書いてみせ「この道を行くと川があるからこっちの道を進んでこの地点の竹ヤブに出よ」という調子だった。だから戦闘指導はいつも円滑で最小の犠牲者、最大の効果を上げた。

酒豪でもあった。飲み出したら夜を徹して飲む。南京陥落の夜も飲みあかした。飲めばいよいよ頭が冴えるのだから、杉田さんは戦火の中で酒を工面してきてはいつも二本の水筒に満たして用意していた。名前の到一が〝倒〟ではないこと

榊谷組の玄関での記念撮影

を口ぐせのように言い、

「おれは到一だ、倒れんぞ」

と、豪傑笑いをしていた。

部下思いの親分肌の人でもあった。中佐の当時、上海の「東亜洋行」ホテルが英国人からの借金で倒産寸前にあるのを知って私財を英国人にたたきつけて救ったことがある。しかも、旅団長となって上海に行ったときホテルの経営者夫人と再会、涙を流してよろこぶ夫人のもてなしを振り切ってさっさと引き上げ、自分にあてられた部屋に杉田さんら部下だけを泊めたという。

佐々木旅団長は事変中（大別山の戦闘以前）北支憲兵司令官を経てチャムス（旧満州）の第十師団長に栄転、あとを篠原旅団長に譲った。昭和二十年七月現地にて召集、第一四九師団長に補されハイラルに駐在、昭和三十年五月三十日、撫順収容所にて脳出血のため死亡、享年六十九歳。

杉田さんは佐々木旅団長との個人的つき合いも深い。長男麟児さんの名づけ親でもある。昭和十六年十二月二十日大連消印の手紙には「前略。長男のために次のとおり命名選定せり。麟児。キリンの如く俊敏に、幕末の英雄勝海舟、幼名勝麟太郎の一字を得てこれにあやかること。中将佐々木到一」とある。

杉田さんは昭和六年一月、第三十三連隊に入隊、満州守備中、同十年旅団司令部付となり、以後作戦論功賞、人事を任務とし、大東亜戦争では第百五十一連隊本部付でビルマで終戦（陸軍少尉）現在は津市で紳士服洋品店を経営。

## 銃火浴び三人戦死

――山砲が射撃開始――

### 河北カン定戦

再び華北に転じた連隊の任務は華北の保定、順徳を中心とした京漢線（北京―漢口）一帯の整備だった。いわゆる華北戡定戦（かんていせん、勝ち定める）参加で四月下旬まで残敵掃討に服したのである。

大本営は十二年十二月中旬、青島および南部山西省に対する戡定を企図し、これを内示した。第一軍は第十四師団によって新郷平地を、第二十師団によって臨汾（りんぶん）平地および蒲州（ほしゅう）平地の攻略を計画した。戡定後は図のように、警備地区を担任させた。

第三十三連隊の属する第十六師団は高邑（こういう）カンタン（カンタン夢の枕――虞生の夢で有名）間に兵力を集結し、別に一部をもって大名、臨清、彰徳を警備し、二月十一日以降歩兵二大隊、砲兵一大隊、工兵をもって磁県（じけん）で随時軍の使用に提供した。

それより先、一月十六日には一部をもって道口鎮付近を撃破し、新郷付近に進出して軍の左側背、彰徳――衛輝鉄道および兵站（へいたん）諸施設の安全を図るべしとの命令を受けた。大野支隊（歩兵一大隊、砲兵二中隊）を新郷に派遣し、支隊は二月二十日彰徳を出発、道口鎮を掃討して二十六日新郷に到着、軍の左翼背を安全にした。

大連に上陸した第三十三連隊は、二月二日午後、連隊本部と第一大隊が、野田前連隊長の見送りを受け

て大連駅を出発、奉天、山梅関、天津、北京を経て六日順徳に到着、城内の軍官学校に本部を設置、第五十二連隊から警備地域を引きついだ。次いで八日、第二大隊を保定に、第三大隊（十、十一中隊は順徳）を武安に配置した。こうして連隊は、徐州会戦の始まる四月まで比較的のんびりした駐とん生活を送った。

だが、戡定作戦実施中である。京漢線、平綏（へいすい）線にしゅん動する敗残兵や共産軍の討伐にたびたび出動した。おもな行動だけを記しておく。

○…第一大隊方面…○第十六師団は後備部隊からの要請でたびたび増援にかけずり回っていた。

三月下旬。第一中隊（田中嘉衛中尉）は、師団司令部を置いた彰徳の飛行場を警備しながら、友軍の救援にも出ていた。渉県付近の友軍をカンタンまで移動させた中隊は、休む間もなく、装甲列車で順徳―石家荘を経て二十五日午前十時半、天下の三関の一つ娘子関（ろうしかん）井陘（せいけい、正太線）に到着。午後四時半娘子関西北方地区にいる一千の敵を討伐せよとの命令を受けた。連隊砲一門と独立山砲一門（仙台）重機二丁を配属された。

付近は河北、山西両省境沿いに大行山脈が南北につらなる険しい地形で、自然の要害をなしている。水はきれいだ。露営二十六日は晴れ、午前七時半出発、同九時娘子関から列車に乗り、同三十分南峪橋梁で下車した。人ひとり通るのがやっとの山腹の道。第三小隊（宮木米吉准尉）を先兵に、第二小隊は分解搬送する山砲、連隊砲の後方を、第一小隊（第二小隊第三分隊を含む）は重機とともに右側高地を進む。

午後四時、ろ橋嶺南方に達したとき、敵影を発見、田中中尉は第二小隊を左側高地に配し、山砲を正面にすえさせた。宮木小隊は、第一小隊から片山安礼分隊長（三重郡川越町出身）の軽機分隊をかり、前進

する。三橋嶺前方四、五百㍍に迫まった時、激しい銃火を浴びた。たちまち田中才治（一志郡嬉野町）野田辰郎（阿山郡）両一等兵、片山分隊長（伍長）が戦死、七人が負傷、クギづけにされた。

片山安礼分隊長

たまりかねた宮木准尉は「おれに続け」とどなると、軍刀を振りかざして突進、前面高地にたどりつくと軍刀に手ぬぐいを巻いて山砲に合図する。待ち構えていた山砲は右、および前面の敵に正確無比の射撃を開始、だめ押しにリュウ弾を撃ち込む。同隊長は天覧射撃をしたほどの腕前だから見事なもの。敵はにわかに抵抗をやめ、退却して行った。

田中才治さん

海陰、湯陰、井陘、石家荘などを経て四月十五日、順徳の本隊に帰り、徐州戦まで同地付近の鉄道を警備した。順徳は「虞（ぐ）や虞やなんじをいかんせん……」と泣いた悲恋の青年英雄項羽（こうう）が、都を定めた所。人口七万、河北南部の政治、軍事の中心地で羊毛皮、油、ナツメなど物産の集散地であっ

た。

［この項は中隊指揮班だった松田雅胤さん（元県警本部）の日記や北川藤正さん（鈴鹿市）の記憶などからまとめた。］

## 自軍の動静つつ抜け

――ホゴにされた改革提案――

### 河北カン定戦

河北カン定戦に参加した三浦俊雄さん（四十五年に死去、夫人は津市丸之内本丸に健在）は、生前思い出を次のように語っていた。

一月八日、保定（パアオ・テイン）に到着、駐とんした第二大隊は第六中隊（辻四五郎大尉）を高陽に配置、警備を固めた。保定は河北省の中央部にあり、北京、天津につぐ人口二十五万の大都会。清苑（せいえん）の別名どおり、優雅な古都の雰囲気をもっていた。蔣介石を育てた軍官学校もここにあった。一方、平和なこの保定に比べ、辻中隊のいる高陽付近の部落は共産軍がいっぱいだった。同中隊は、同地の警備を第五十連隊にバトンタッチする三月一日まで毎日のように夜襲を受けていた。

紀元節（二月十一日）を祝って保定の大隊本部から高陽に食糧や酒などを運ぶ途中の輜（し）重隊が共産軍の待ち伏せにあって全滅した。三浦少佐は、二十五、六の両日、大隊主力を率いて高陽に出撃、「捕えた日本兵（輜重隊員）を返せ、返さないと全部落を焼き払うぞ」と共産軍に呼びかけ、生き残って捕えら

れていた兵隊一人を釈放させた。引き続き、呂正繰指揮下の約二千の共産軍を討伐、山中に追っ払った。ここで三浦少佐は考えた。（輜重隊がやられたのも、わが方の動静が敵につつ抜けだったからだ。困ったことだぞ）

「軍隊の教育方針や内容、訓練は第一線帰還者の体験によって日ごとに新しく変えるべきだった」というのが当時の三浦少佐の持論で、このことは何度も上申してきた。

話は変るが、その頃各地で歩哨は任務中あやしい影を見たら「だれか！」と三度くりかえしてとがめ、返事がなかったら発砲せよ（歩兵操典）と教えられていた。だが敵中では「だれか」ととがめたときはすでに相手は発砲しているのだ。こうして命令に忠実な兵士たちが次々と戦死した。だから三浦少佐は「あやしい影を見たら、身をかくしてから相手を確認するように」と部下に言い聞かせた。敵は決してバカではなかった。戦いが日を追うにつれ、敵は日本軍の命令や作戦のやり方を心得て、その裏をかいた。高陽付近で全滅した輜重隊の動きも、敵は同隊が保定を出発したときから察知していたにちがいない。三浦さんは第一線の体験から、教育の改革をたびたび唱えたが受け入れられなかった。

三浦大隊長も支那事変の前、朝鮮討伐など七、八年間も連続第一線に出ている。戦線で連続して何度も危機に会っていると、だれも（自分だけが、最も危険にさらされているのじゃないだろうか）と思うようになり、体力より精神的に参ってくる。連隊長以上ともなれば交代の機会も多いが兵には常に前進を強いられるだけで帰還がない、出征当時の盛んな意気はしだいにくだけてくる。一つの戦闘で手柄をたて金鵄勲章をもらっても、次の戦いでは死ぬ危険にさらされているのである。

「だからね、大きな戦闘がすむごとに将兵を内地に帰還させ、一時休養させるとともにその体験を新兵教育にとり入れるべきだった。古い戦闘に参加しただけの幹部の教育では実践に通用しない。このためいくたの貴重な命をムダに散らせたことか」としみじみ語っていた。

大隊長クラスはちょうど働き盛りで戦死者が多い。しかし三浦さんには終始〝幸運〟がついて回っていたようだ。

「戦闘詳報や戦死者名簿は水害ですっかりなくしてしまいました」という。

大正五年士官学校卒、同年十二月第三十八連隊（奈良）の旗手（中尉）として満州守備、以後第九連隊、第三十八連隊を経て昭和四年から第三十三連隊、支那事変は大隊長で参加。その後十六師団の報道部長となった。大東亜戦争は十四軍本間中将指揮下の南九州連隊（中佐）として比島に上陸、ダバオを守備、十八年満州の第一国境守備隊長（大佐）となり、興安嶺で終戦、二十三年十月まで苦しい抑留生活を送った。広島出身。

## 市丸ら芸能人が慰問

――兵士ら華北の春楽しむ――

### 河北カン定戦

保定に駐とんしていた第二大隊は三月三日出発、定県で奈良、京都、福知山各連隊（一個大隊ずつ）および旅団から出された戦車中隊と合流、朱徳軍の本拠地、阜平（ふへい）の討伐に出た。定県からは自動

車に分乗、曲陽、南荘、厳城鎮の小敵を破り、八日朝には阜平を見おろす高地に出た。清川の川原をはさんで、その向こうに見えるのが、朱徳が生まれたすばらしい阜平城だ。敵は、阜平を取り囲む陵線から迫撃砲、チェコ機銃で応戦を開始した。討伐隊の第一線となった第二大隊と工兵隊は攻撃前進に移る。これまでの戦闘から朱徳軍は相当の抵抗をするだろうと予想していたが、阜平城からはまったく反撃の気配がない。

実は朱徳軍はいち早く大行山脈を越えて山西省に逃げており、城内はもぬけの殻だった。

第二大隊は予定より早く正午前に城内に入り、焼き打ちにかかった。このとき南方から友軍機二機が飛来し、みるまに急降下爆撃を開始した。朱徳軍の反撃を予想して空軍に協力を頼み、正午を期して爆撃する手はずになっていたのだ。第二大隊が早く入城しすぎたのと焼きうちの煙で確認できず、同士討ちにあってしまったのだ。相手が悪い。たちまち工兵隊員が吹っ飛ばされる。友軍機にやられるほど情なくくやしいことはない。しかしさいわい二大隊には損害がなかった。

十三日、無事に保定へ帰り、第五十連隊に警備を引きつぎ、十八日順徳に移動、四月二十三日まで京漢線の警備に当たった。この間、市丸や小林千代子、徳山タマキら芸能人の慰問を受け、華北の春を楽しむという機会もあった。第六中隊の第一小隊長だった横山孝三さん（七三）＝久居市新町＝は市丸ねえさんの出迎えをしたそうだ。

○　○　○

第八中隊第一小隊の分隊長だった四日市市朝日町、米穀商、前田勝三郎さん（七七）も、このときの思い

慰問に訪れた市丸さんと小林千代子さん

出を次のように語っていた。

前田分隊長は石家橋駅の警備をしていた。このとき市丸らがくることを耳にした。同駅は通過の予定だが、列車すれ違いのため少し停車するらしい。「ひと目拝ませてもらおうや」兵士たちはわいわいはしゃぐ。そこへ三浦大隊長が巡視に回ってきた。駅頭で整列した分隊は、三浦大隊長の「解散」の号令にも動かない。「お前ら、いったい何だね」と三浦少佐。分隊員はもじもじしながら「市丸ねえさんを迎えるのでアリマス」と敬礼したものだ。すると三浦少佐も「そうか、それでは僕も歌をきかせてもらう」と腰をおろしてしまった。

やがて市丸はじめ、バンドの乗った列車が到着、時間待ちのため約三十分停車することになった。兵士たちの懇望で列車の窓から身を乗りだした市丸、小林千代子は「いま内地ではやっている歌をきいて下さい」と〝見よ東海の空明けて、旭日高く輝けば…〟（内閣情報部選定の愛国行進曲）を歌ってくれた。市丸さんは「兵隊さんたちもなにかやって下さい」と所望すると「よしきた、待ってました」とバナナのたたき売りをユーモアたっ

ぷりにやってみせる兵隊があった。市丸さんも大よろこび、一同にぎやかに楽しいひとときをすごしたものだった。

「このあと二月十一日、紀元節で特別に出る下給品を受け取りに行った西岡勝軍曹以下数人がゲリラに襲撃され、ほとんど全滅してしまった。生きて帰ったのは一人か二人でした」と前田さんはいまなお戦友のめい福を祈っている。

## 「戦死者名に弟が」

――正夢を見た松原一等兵――

### 河北カン定戦

出征中故郷の親が夢枕に立ったという経験を語る人は少なくないが、松原鶴一さん＝度会郡度会町注連指出身、五十六年に死去＝もそのひとり。一等兵で第五中隊（中隊長は村岡常雄中尉、多気郡多気町相可）第二小隊の軽機分隊射手だった。

四月三日、この日は軍旗祭だったと記憶する。そのころ第五中隊は内邱（ないきゅう）付近の鉄道警備に当たっていた。軍旗祭はお祭りみたいなもので式典のあと相撲大会が開かれ、午

その当時の保定の駅

後下給品の酒、菓子などが分配され、あとは無礼講となった。当時、酒に弱かった松原一等兵はわずかで酔っぱらってしまい、そのままゴロリと横になった。そこへ弟の清祐一等兵がぶらりとやってきた。彼は第十一中隊の軽機分隊で、武安付近を警備中のはずだった。

「あにき（兄貴）…」

力のない声だ。顔も青白い。日よけの布切をつけた戦闘帽をかぶり、手は剣をつけた銃を持っている。ふと視線を落とすと、腰から下がぼおっとかすんで見えない。「しゃてい（弟）か、どうした！」と叫んでからだを起こした。とたんに弟の姿はかき消え、松原一等兵は目ざめた。隣りには、これも下給品の酒に酔いつぶれた三、四人の戦友が大いびきで眠っている—内邱の昼下がりであった。（会いたい、会いたいと思っていたので夢を見たのかしらん）と思ったが不吉な予感を禁じ得なかった。しかし一等兵の松原さんに弟の安否をたしかめるすべはなかった。

支那事変で松原家は兄弟三人が出征した。長男の鶴一さんと三男の清祐さんが第三十三連隊、二男の繁次さんは台湾の笠井部隊に入隊していた。長男の鶴一さんとしては、同じ連隊の清祐さんのことが気がかりで「現役兵だから、しぼられてつらいだろう」と案じていた。同じ部隊でありながら中隊が違うから出征以来あまり会っていなかった。最後は南京から華北へ移動するときの船中だった。船に酔って甲板へ出るとやはり船酔いの先客があった。それが弟の清祐一等兵だった。

さて、徐州会戦に参加するため部隊は前進を開始した。済南に向かう途中、同郷の山本新次郎特務兵が同じ列車に乗り合わせていた。「うち（故郷）から新聞を送ってきた。見ないか」

と差し出され、

「懐しいなあ」

と、松原一等兵は新聞の束の中から伊勢新聞を抜き出し、内地の香りを胸に吸い込んだ。ページをくっていき、あっと息をのんだ。戦死者名のところに弟、清祐一等兵の名を見つけたのだ。戦死した日は、やはり夢枕に立った日だったのだ。

済南に集結、第十一中隊の久保准尉をたずね、弟の戦死を確認した。悲しさとくやしさで涙があふれた。しかし一方では（やれやれ、これで弟の安否を気づかうことなく、おれは精いっぱい戦える）とも思った。松原一等兵は戦友から弟の遺骨を受け取り、それを胸に抱いて徐州会戦にいどんだ。この話は当時の新聞にも紹介された。

松原家はこのあと末弟の勇次さんも第三十三連隊で出征、レイテで戦死している。十三年二月、佐藤正俊知事から「支那事変に三人の応召軍人を出したるは誠に慶賀にたえず、記念品（カブト）を贈り、その名誉を表彰す」との表彰状をもらった。

「当時は名誉だったに違いないが、戦争に兄弟四人ともかり出され、二人を失った。戦争は絶対くりかえすなと叫びたい。わたしは徐州戦の睢県で負傷―、武漢攻略には参加しなかったがあの馬の背のような岩ばかりの南京・紫金山の戦闘はまさに地獄でした」

と、ノーモア戦争を生前言いつづけていた。

昭和六年兵、十四年一月から四月まで久居で新兵教育（後述）大東亜戦争中は朝鮮で三年十ヵ月警備官

をつとめ、同地で終戦。

### 鈴木分隊長襲撃される

——電話で増援要請、助かる——

**河北カン定戦**

「大きな戦闘はもちろんだが、かえって小規模の襲撃の方がこわいものだ」と回想するのは第九中隊の分隊長だった鈴木勉さん（七二）＝鳥羽市安楽島＝である。

第三大隊は河南省武安に駐とんしていた。第十、第十二両中隊を順徳（河北省）に配置し、第九、第十一両中隊は河北省カンタンから山西省潞安に通じる輸送路を警備させていた。

大隊本部を置いた武安はカンタンからトラックで約一時間（約三十二キロ）輸送の中継地として軍事上の重要拠点だった。人口わずか六千余の町だが、山西、河北からの物資集散地としてにぎわっていた。中国独特の高い斜塔が目をうばい、豪華な城門が三つもあった。料理店には老酒（ラオチュー）があった。城壁に立てば、西に白雪をいただいた大行山脈がそびえ立ち、南は遠く黄河に続くかと思われる一面の麦畑がのぞめた。

このころ、武安から三十二キロばかり離れた治陶鎮（じとうちん）＝やとうちんと記憶している人もある＝に第九中隊の一個小隊が警備していた。敵は方々で出没、そのたびにわが軍の電話線が切断された。

二十三日。

鈴木分隊長は、部下六人を連れ斎藤寿男通信上等兵（新潟県出身）ら三人の軍通信兵の護送をして電線の点検、警備に出発した。治陶鎮から二キロ入った顧義部落にさしかかると、治安維持会長（部落民）が「七里（日本の約五キロ）奥に約百人の敗残兵がいます」という。こちらは総勢十人だ。すぐ中隊に増援を連絡して進んだ。電話線（電柱）は山あいの川に沿って張りめぐらされていた。なるほど電線は切断されているが、敵の姿はない。ほっとしてともかく修理をすませた。飯を食っていると、突然約一個中隊と推定される敵に襲撃された。

あわてて散開、応戦する。だがこれほど心細いことはない。本線から離れた山の中、しかも敵は付近の地理にくわしい共産ゲリラだ。

ピシッ！

と敵弾が目の前の土にかみつくたびに、血の気が引く思いだ。さっき連絡した増援隊が早く到着するとよいが―。鈴木分隊長、ふと気がつくと兵一人と通信兵二人の姿がない。（はて、どこへ行ったのか、まさか逃亡したのではあるまい。しょうのない奴らだ）とシタ打ちしたが、いまは必死の防戦で精いっぱい。敵は百余、鈴木分隊の全滅は時間の問題だ。兵たちは戦死を覚悟した。だが危機一髪、増援の軽機分隊が到着、敵はどこへともなく姿を消した。

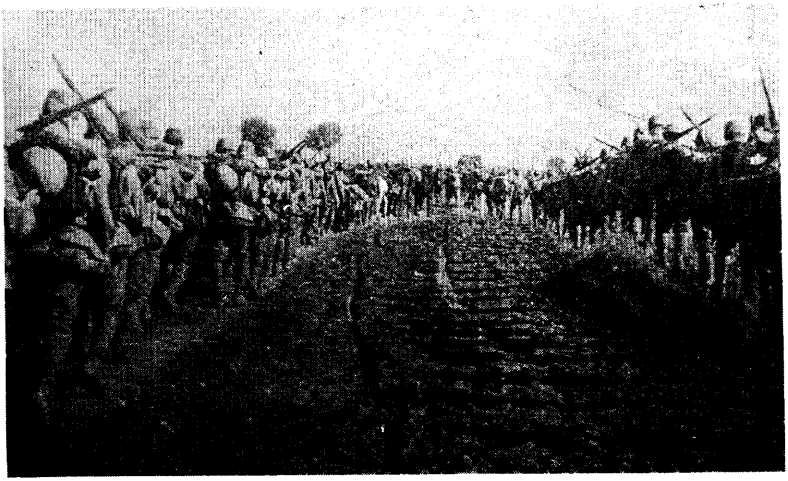
行く方を気づかっていた兵と通信兵の三人は、敵襲と同時に山ろくの安全地帯に退避して中隊への増援急派の電話連絡をとっていたのだ。「三人の名前は忘れましたが、彼らのおかげで助かったようなものです」と語っている。

同中隊は三月七日まで治陶鎮に駐とん、第十一中隊と交代したが、その三日後の十日、第十二中隊は夜襲され、五人の戦死者をだした。

○　○　○

話は少し前のことだが、三月三日、第九中隊に太田雄三中尉（津市）が着任した。当時のもようを次のように回想している。

「軍用トラックで武安に着くと上田大隊長から〝太田、お前もきたか〟といわれたものだった。二日目に、宿舎の屋根に敵弾の音を聞いた。着任一週間後から、一週間おきの割合で渉県付近まで討伐に出た。わたしとしてははじめての野戦でここで失敗した。幸い何ごともなかったからよかったが、なぜ歩兵の護衛をつけなかったか、と、大隊長からしかられたものだった。なるほど機関銃小隊は急襲されたら応戦の方法がない。以後キモに命じたものでした」



敵が鉄道線路を取りはずして前進を阻んだ

## 「MGのひげさん」

――一志町の小出分隊長　機関銃中隊で活躍――

### 河北カン定戦

〝MG（機関銃中隊）のヒゲ〟の異名をとった一志郡一志町波瀬、小出闌（たけし）さん（七一）＝大和菌学研究所、測量士＝の討伐記。小出さんは当時軍曹で分隊長、久居市新町の堤千里さん（八六）が小隊長（少尉）だった。

第三大隊（上田孝少佐）は第十、第十二両中隊を連隊長指揮下で順徳に残し、大隊本部（通信、大小行李）第九、第十一中隊、機関銃中隊、大隊砲小隊は二月八日、河南省最北部の武安に駐とんした武安は人口七千三百の町だが、山西、河北地区からの物資の集散地として城壁を構え、県知事の指揮下には自治軍八百、警察軍百二十を持っていた。城内の民家を借りて分宿した大隊は、おもに河北省カンタンから山西省潞安に通じる輸送路の警備に当たった。

当時、敵は後方かく乱のためゲリラ隊と共産軍を用いてわが輸送隊や通信網を襲撃した。連隊がこうした軍の後方地帯の鎮圧の任務を命じられたことはすでに述べたとおりである。

約五十キロ離れた渉県（しょうけん）には、第一線後方警備と糧まつ集積のための第百七師団の一部が駐とんしていた。百七、百八師団は未教育の補充兵で編成されていたから、まともに銃の操作も出来ないありさまで「百八師の老兵恐るるに足らず」というポスターが各所に張られるなど、ゲリラになめられ、た

びたび襲撃されていた。

第三大隊は、渉県の百七師団が襲撃されるたびに、大なり小なりの部隊を送っていたが、なにしろ五十キロ離れているのでほとんど間に合わなかった。ところが三月九日午後五時ごろ、連隊本部は「明十日（陸軍記念日）を期して、敵一個連隊が渉県を襲い、京漢線に進出する」との情報を密偵からキャッチした。

連隊本部は、第三大隊に急拠出撃を命じ、十日午前六時までに自動貨物（軍用トラック）五十台を配置させた。だが、大隊が渉県に到着すると、百七師団の警備隊長から「敵は企図を変更して前進してこなかった。西南方へ向かったらしい」との報告を聞いてがっかり。上田大隊長は警備地区を視察したあと、全員武安に引き上げるよう命令、到着後わずか二時間の滞在で引き返すことになった。

大隊主力が渉県に行っている留守中に武安から三十数キロ離れた治陶鎮（じとうちん）の警備隊が襲われた。ここには第十一中隊の野々正巳少尉（員弁郡藤原町）の三小隊の分遣隊が警備していた（詳細は次項）このため武安へ引き揚げる途中の大隊は、第十一中隊（松野亮作中尉、大別山で戦死）と機関銃二丁（堤千里少尉）に救援を命じ主力（車両）はそのまま武安に向け続行した。

第十一中隊主力は〝とむらい合戦〟といきごみ、治陶鎮にかけつけたが、すでに敵は引きあげてしまったあとだった。このときスパイに使っているシナ人から、約六キロ離れた万安（まんあん）に一個大隊程度の敵がいるとの情報が入った。河北カン定戦では、日本軍の使っているスパイ（密偵）と、便衣の共産軍との行動はほとんど敵につつぬけだったが、反面敵のようすもくわしくわかっていた。

第十一中隊は十一日夜半、スパイを案内に立てて治陶鎮を出発した。音が立たないように軍靴には南京

袋を巻き、馬にはワラジをはかせたし、もちろん銃剣なども布で巻いて防音した。万安までは、三、四㍍幅の道が折り重なる高さ四、五十㍍の山々の間をぬっている。午前二時ごろまで敵のようすをうかがって待機し、夜の引きあけに襲撃することにした。

## ゴボウ剣を身構え進む

――ニワトリ撃ちタマ切れ――

### 河北カン定戦

あたりがしらみはじめた午前六時、万安の入り口に着く。山に囲まれた平地に敵兵舎がひっそり並んでいる。松野中尉、堤少尉以下兵五、六が先頭に立って進む。部落の入り口で道が二つに分かれており、そのわかれ道の所に敵歩哨が居眠りをしている。そっと近づきつかまえる。尋問するが相手は話をはぐらかす。こうなったら奇襲だ。このころには日がのぼり、霧も晴れて兵舎の土蔵がくっきりと見えてきた。松野中隊長は第二小隊（西山道男少尉、名賀郡青山町下川原）に左の道から野々小隊（あるいは第一小隊）を右から回らせ、堤少尉の機関銃二丁を正面に据えさせた。

「突撃！」

松野中尉の号令で重、軽機、小銃がいっせいに火を吐く。不意をつかれた敵は大混乱、われがちに裏山へ逃げて行く。中隊主力は部落になだれこむ。敵兵は全部退却しており、おんな子供がうろうろしていた。よからぬ行為をする兵があってはと松野中尉は婦女子を一画に収容、直ちに家宅捜査して無電機などを破

壊、兵舎に火を放った。

ひと息ついた中隊は午後三時ごろまで滞在し、日が暮れてから武安へ引き上げることにした。左右の道路から攻撃に回った二個小隊には深追いするなと注意した。部落にはいった将兵は、兵舎内にあった出来たてのまんじゅうで腹を満たし、所在なさに重機でニワトリを撃った。敵があっけなく逃げていったので小出軍曹は腹いせにニワトリを撃ちまくった。

こうして午後三時ごろ中隊は万安に集結、夕方武安向け出発した。万安から武安までは約三十五キロの山道、機関銃が最後尾を進む。真っ暗な道をたどる中隊。それまでなりをひそめていた共産軍も中隊の出発と同時に行進を起こしたのだ。彼らは懐中電灯を照らしながら、両側の山から迫ってくる。

これほど無気味なことはない。小出軍曹は射手をうながしたが「ニワトリを撃ちまくってタマが残っていません」と悲鳴をあげる。やむなく小出軍曹は十四年式短銃を構え、部下はゴボウ剣をぬいて身構えながら進む。たまりかねた上等兵以下三人が大隊本部の位置まで逃亡して行ったほどだった。この戦闘で松永庄衛伍長（桑名郡）三枝益市伍長（鈴鹿市）が戦死した。

MGのひげさん小出分隊長（左）

「あのときはびっくりしました。さすがの私も死を覚悟しました」

と回想している。小出さんは、大東亜戦争は独立混成二十九旅団長で十九年南方へ、軍曹でモールメンで終戦。

第三大隊はその後も討伐をくりかえした。四月十三日には順徳から合流した第十、十一中隊とともに山西省の討伐にでた。十七日武郷近くまで進んだとき、連隊本部から武安へ引きあげよとの命を受けた。二十三日にはカンタンから山東省済南に向け出発した。そして済南を出て二日目の昼ごろ接敵、第三機関銃第二分隊長、小黒忠雄伍長（安芸郡豊里）が胸を貫通され戦死した。（堤千里さんの話）

## 治陶鎮部落を警備

――野々小隊　敵襲で五勇士が戦死――

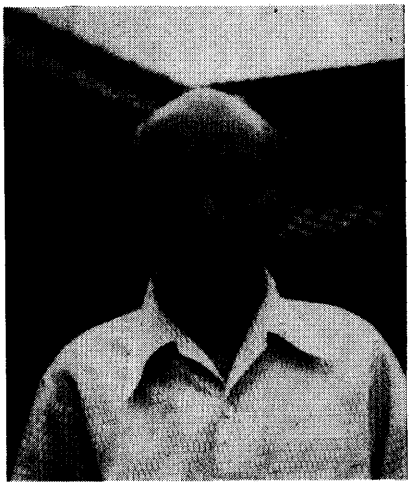
### 河北カン定戦

前項でもふれたが、治陶鎮（じとうちん）で夜襲されたときは文字通りの死闘となった。そのときのもようを野々正巳さん（員弁郡藤原町大貝戸出身）は生前次のように語っていた。

野々さんは第十一中隊（松野亮作中尉）の第一小隊長（少尉）だった。三月十二日夕、野々小隊は治陶鎮の警備についた。ともに進んできた松野中隊長、堤機関銃小隊長以下主力は、敵情地形を偵察のあと野々少尉に配置の大綱を命じ、十五日武安に引き上げて行った。野々少尉以下五十一人だけは本隊から二十四キロも離れた山にかこまれた治陶鎮部落を警備することになった。唯一の頼みは一本の有線通信である。野々

小隊は部落の北門と西門をぴったり閉じ、主要路に近い南門付近に分宿した。少ない兵力を大きく見せて敵をあざむくため下士官以下七人を南門に配置、東門には歩哨を立て、北西門は巡察させるなど昼夜に分けて警戒した。

一方朱徳軍は山西に兵力を集中、各山頂には必ず見張りを出し、夜間に発砲してくる。野々小隊は、こうしたゲリラの包囲下で一週間を過ごした。この間、他部落の輸送隊は毎日のように山西方面向け治陶鎮を通り過ぎて行った。八日目には数十車両編成で正午ごろ通過して行った輸送隊が、同二時過ぎ襲撃され、食糧など奪われるという「東陽館の戦闘」もあって、野々小隊をいよいよ緊張させた。


現在の小出闌さん

その翌日の夜、月も沈みかけた十時ごろ、南門内側の辻堂に配置した警備隊（分部正軍曹、河芸郡）を巡察し、マキをかこんで三十分ほど話し込み、それから約二十㍍離れた隊長宿舎に帰った。武装も解かず、軍刀を枕元に置き、ごろりと横になったときだった。辻堂付近にサク裂音を聞き、軍刀をひっつかんで飛びだした。

「敵襲だッ」

と絶叫する部下の声を聞きながら、哨煙の立ち込めるヤミの中をだれかとぶつかり合いながら駆けた。一瞬のできごとだった。分部軍曹以下松井惣兵衛伍長（志摩郡）岡一男伍長（鈴鹿郡）中川量上等兵（河

芸郡）水谷九衛門上等兵（鈴鹿郡）の五勇士が戦死した。

中川上等兵などは敵の青竜刀を左手で受けとめたのか、指四本が切り落とされていた。ただちに残る兵力を襲撃守備に着かせて一夜を明かした。頼む通信線は切断され、まったくの孤立状態に陥ってしまったのだ。野々小隊長は歯ぎしりしてくやしがった。

本隊に救援を求めるのが先決だ。駐とん以来、小隊に協力してくれている元八路軍の兵、李に本隊への連絡を頼む。彼は信頼できた。襲撃のあらましを書いた通信紙を彼のズボンのぬい目にかくし、ホシガキ行商人に仕立て、午前八時送り出した。野々少尉は彼の成功を祈りながら、機密書類を焼き、部下に決意をさせ、守備態勢を固めた。

恐怖、緊張…もちろん一睡もしていない。将兵の顔はある者は土色に、ある者は青白く沈み、血走った目だけがギラギラ光っている。しかし、死守を誓った互いの信頼感は肉親以上に固い。五人の戦友の遺体を守りながら敵襲に構まえていた。第二夜が明け、やがて正午を回った。煙を立てられないので乾パンをかじって、かろうじて飢えをしのぐ。

午後二時ごろ「友軍だ、友軍の重機の音が聞こえる」南門の歩哨が叫んだ。たしかに友軍の銃声だ。野々

作戦出動のため小隊集結

少尉は安堵の胸をなでおろした。部下の顔にも生気がよみがえった。高倉伍長以下十人に残留を命じた野々少尉は残った三十数人を連れてひそかに南進、約三キロ地点で松野中隊長を迎え、中隊主力とともに夕方治陶鎮へもどったのであった。

野々さんは「双眼鏡に松野中隊長のヒゲの顔がうつったときには部下の制止を振り切って思わず敵弾の中をかけ出した。堤少尉や三輪小隊長の顔も、まるで数年ぶりであったかのようになつかしかった」と回想、生前部下の英霊を仏壇にまつり、毎日供養していた。野々さんは大別山で負傷、十四年から留守隊の大隊副官、十五年八月東京の歩兵第一連隊へ、百一師団の高級副官で終戦、村長、助役、公民館長をつとめ、四十三年死去。

# 第三章　台児庄方面作戦

## 不拡大方針の破綻と徐州会戦

軍の主流の考えは何度も述べている通り、徹底した不拡大方針であった。特に石原莞爾少将作戦部長が統率する参謀本部はこの意見であり、早期戦争終結を図っていたのであったのに何故拡大していったか、その経緯と経過を概観したい。

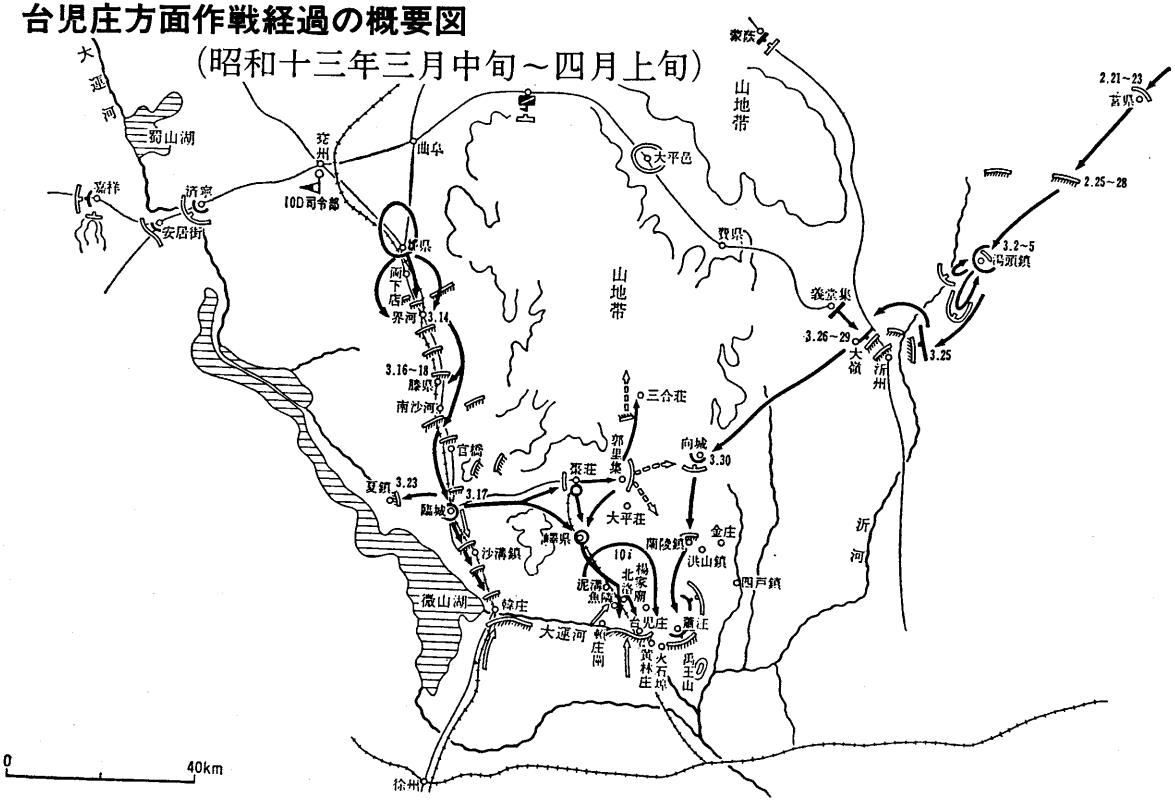
その最も具体的衝動は深入りし過ぎたがための台児庄方面の転進ではなかったろうか。それでは先ずその台児庄方面の作戦を戦史により遡って見ることにする。

後述するところではあるが、当時の大本営作戦課長も述懐している如く台児庄作戦は軍の不拡大方針の下、戦局を整備整頓して和平の端緒を摑もうとするのに血眼であった。その配慮、心証を理解出来ず逸（はや）ったことがあるとの謗りは覆うべくもないが、前線部隊は目に余る敵の挑発、挑戦おさえ難くして起きていった作戦であった。

中国側の宣伝ほどではないものの、悲観的結果になって転進せざるを得なかったことは事実である。それがため徐州作戦が惹起したものだというのは走り過ぎる思考であるが一因であることは避けられぬ。それがあの大別山の死闘となり、武漢作戦へと進展していったのであったのか。

# 台児庄方面作戦経過の概要図

（昭和十三年三月中旬～四月上旬）



あたかも軽装、無防御準備の夏山へ、二、三日の登山に出かけたのが大惨事を引き起こし、取り返しのつかぬことになったというに一脈通ずるものがある。勿論それだけではない。第一巻所載の「何故戦わねばならなかったのか」に総てが帰するものではあるが、兵はそれを知らない。ただ戦に勝つことのみ、当面の戦勝を得ることに不惜身命挺身したのである。

ここに瀬谷、坂本両支隊は半数以上の戦死傷を数えることになった。その勇奮を讃え、戦死者の冥福を祈るものである。

## 台児庄方面の作戦

### 津浦沿線方面の敵軍の活発化

第二軍の第十師団は昭和十三年二月上旬、兗州、済寧、鄒県地区に進出して同地区の治安確保に任じていた。同師団正面の敵は逐次増加し、二月上旬から敵の行動は特に活発となり、四川軍が大挙して北上するとの情報もあった。二月十二日、汶上守備隊（歩兵第三十九連隊第三大隊〈一個中隊欠〉基幹）は山東軍の一部（第八一師）の攻撃を受け、十三日には済寧（歩兵第三十九連隊主力所在）が山東軍主力（第二〇、第二九、第七四師）の包囲攻撃をうけた。第二軍は、第十師団前面の敵を撃攘することを企図した。

北支那方面軍は昭和十二年末以来、中央に対し、北支と中支を連結する徐州作戦及び武漢方面の敵に威圧を加えるため、黄河右岸に拠点（鄭州、開封など）を占領する必要性をしばしば意見具申していた。

昭和十三年二月初頭における北支那方面軍、第一軍、第二軍の参謀は次のとおりであった。

北支那方面軍参謀

軍参謀長　岡部直三郎中将（18期）
軍参謀副長　河邊　正三少将（19期）（二月十四日まで）
第一課参謀（作戦）
下山　琢磨大佐（25期）　堀毛　一麿中佐（28期）（兼）塚田理喜智中佐（28期）　寺田　濟一
中佐（28期）　大野　武城少佐（31期）　花谷　浩少佐（34期）　春　仁　王少佐（36期）
第二課参謀（情報）
大木戸三治大佐（25期）　菅波　一郎中佐（28期）　塚田理喜智中佐　（兼）長嶺　喜一
中佐（28期）　浅井　敏夫少佐（31期）　吉武　安正少佐（33期）
第三課参謀（後方）
橋本　秀信中佐（27期）　長嶺　喜一中佐　安達　與助中佐（30期）（兼）浅井　敏夫少佐　阿
部　芳光少佐（32期）　折田　正男少佐（34期）　穐田　弘志大尉（36期）　種村　佐孝大
尉（37期）
第一軍参謀
軍参謀長　飯田祥二郎少将（20期）
第一課参謀（作戦）
森　赳中佐（28期）　友近　美晴少佐（32期）　八野井　弘少佐（35期）
第二課参謀（情報）

木下　勇大佐（26期）　桜井徳太郎少佐（30期）　鈴木　京少佐（35期）　中村　忠英
少佐（31期）

第三課参謀（後方）
板花　義一大佐（23期）　桜井徳三郎少佐（30期）　倉橋　武雄大尉（37期）

第二軍参謀
軍参謀長　鈴木　率道少将（22期）

第一課参謀（作戦）
岡本　清福大佐（27期）　鵜澤　尚信中佐（28期）　大木　良枝少佐（29期）　小沼　治夫
少佐（32期）

第二課参謀（情報）
山田国太郎中佐（27期）　清水孝太郎少佐（33期）　大平　秀雄少佐（33期）

第三課参謀（後方）
田坂　専一中佐（27期）　山津兵部之助少佐（33期）　小山　公利大尉（37期）

昭和十三年二月三日、参謀次長は北支那方面参謀長あてに次の電報を発している。

貴軍将来ノ作戦ニ関シテハ種々照会アリタルモ慎重研究ノ結果左ノ如ク定メラレタリ

一　膠済鉄道沿線ハ現在ノ占拠線又其他ノ方面ハ黄河ノ線ヲ越エテ作戦ヲ進ムルコトナシ

二　将来第百十四師団ヲ貴軍ノ指揮下ニ入レタル場合ニ於テ之ヲ平津地方ニ位置セシメ大本営ノ使用ニ

便ナル如ク待機セシム〔以下略〕

三　第五師団ハ所要ニ応シ迅速ニ海路他方面ニ転用シ得ル為膠済沿線ニ位置セシム〔以下略〕

これに対し、方面軍第一課長下山大佐は参謀本部第二課長河邊大佐あてに次の電報を発した。

参電七五五拝誦、徐州東西ノ隴海線北方就中山東省湖沼地帯ノ西側地域ニ於テハ我軍ニ依リ尚大ナル打撃ヲ蒙リアラサル十数万ノ支那軍集結シ之ヲ根拠トスル便衣隊等多数我第一線ノ後方ニ潜入随所ニ反撃ヲ敢テシ最近殆ント連夜襲撃ヲ受ケ第一線ハ漸ク奔命ニ疲ルルノ徴ヲ認ム　此ヲ以テ軍自衛ノ見地ヨリ機ヲ見テ上記敵ノ根拠地ニ向ヒ痛撃ヲ加フルノ必要アリ

特ニ済南南方ノ地域ニ在リテハ現在ノ占拠線ヲ越エ反撃的作戦ヲ実施セサルヘカラサル時機逼迫セルモノト判断セラルルニ付此ノ点ニ関シ行動ノ余地ヲ存セシメラルル如ク御配慮煩ハシ度

これに対し、参謀本部第二課長は二月四日、攻勢作戦禁止の左記電報を発した。

画然タル天然的地障ノ托スヘキモノナクシテ数上極メテ優勢ナル敗残ノ敵ニ対スル方面ニ於テハ貴電ニ見ルカ如キ情勢ノ現出ハ想像ニ難カラス　然レトモ当方トシテ考フルコトハ敵ニ誘発誘致セラレ思ハサルニ戦面ヲ拡大シ兵力ヲ吸収セラルル事ノ国軍全般ノ整理整頓即チ次テ考フ可キ大転機ニ対応スル施策ニ妨害ヲ生スルノ点ニシテ貴電ノ如ク当面ノ敵ニ一大痛棒ヲ食ハサントスルモ地勢上ヨリ観テモ要スルニ撃攘スルト云フニ過キス　此ノ結果縦令山東省境ヲ越エスト云フモ此処ニ拠ルヘキ地障トテ無ク守ル訳ニモ行カス現在ノ態勢ヲ稍々南方ニ転移セシムルト云フニ過キサルヘシ〔中略〕従ツテ現在ノ占拠地域以南ニハ仮令自衛上ノ攻撃動作トハ云ヘ其ノ結果占拠地域ヲ拡大シ若クハ更ニ多クノ兵力ヲ吸収セ

ラルルカ如キハ既ニ確立シタル中央ノ大方針トシテ絶対ニ御許無キモノト承知セラレ度

北支那方面軍は中央の意図に基づき二月五日、第二軍に対し、「第二軍司令官ハ爾今黄河以南ニ在リテハ概ネ現在ノ占領線以北及運糧河〔大運河〕以東ノ山東省並黄河以北ニ在リテハ従来ノ作戦地域内ニ於テ各要地ヲ占拠シ該地域ノ安定確保ニ任シ特ニ其ノ治安ヲ粛正スヘシ　青島市及其ノ付近ノ要地占拠ニ関スル任務故ノ如シ」と命令した。

**第二軍の撃攘指示**

前述のような経緯があったが、第二軍は当面の敵に一撃を加え、敵の反攻企図を破砕し、占拠地の確保を図るため、第二軍参謀長は二月十七日、軍司令官の意志として、次のように指示した。

一　第十師団は汶上、済寧付近の敵を大運河以西に撃攘すること。

二　第五師団は一支隊を兗州方向に前進させて第一師団の作戦を容易ならしめること。

第五師団は二月中旬、膠済沿線の警備に任じており、部隊の編成概要は次のとおりであった。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 師団司令部 | 師団長 | 板垣征四郎中将 | （16期） |
| | 参謀長 | 櫻田　武大佐 | （25期） |
| 歩兵第九旅団 | 旅団長 | 國崎　登少将 | （19期） |
| 歩兵第十一連隊 | 連隊長 | 長野祐一郎大佐 | （24期） |
| 歩兵第四十一連隊 | 連隊長 | 山田鐵二郎大佐 | （20期） |
| 歩兵第二十一旅団 | 旅団長 | 坂本　順少将 | （18期） |

歩兵第二十一連隊　連隊長　片野　定見大佐（23期）
歩兵第四十二連隊　連隊長　大場　四平大佐（22期）
騎兵第五連隊　連隊長　小堀　是繁大佐（21期）
野砲兵第五連隊　連隊長　武田　馨大佐（25期）
工兵第五連隊　連隊長　和田　孝次大佐（22期）
輜重兵第五連隊　連隊長　原田　真一大佐（19期）
第五師団通信隊、同衛生隊、同第一～第四野戦病院

二月中旬の第十師団の編成概要は次のとおりである。

師団司令部　師団長　磯谷　廉介中将（16期）
参謀長　梅村　篤郎大佐（22期）

（三月一日）
歩兵第八旅団　旅団長　長瀬　武平少将（18期）
歩兵第三十九連隊　連隊長　沼田多稼蔵大佐（24期）
歩兵第四十連隊　連隊長　長野　義雄大佐（21期）

（三日一日）
旅団長　田嶋榮次郎少将（18期）

（三月一日）
瀬谷　啓少将（22期）

歩兵第十連隊　連隊長　赤柴八重藏大佐（24期）
歩兵第六十三連隊　連隊長　福榮　真平大佐（23期）
騎兵第十連隊　連隊長　桑田　貞三中佐（23期）
野砲兵第十連隊　連隊長　谷口　春治中佐（26期）
工兵第十連隊　連隊長　須磨　學之大佐（25期）
輜重兵第十連隊　連隊長　前野　四郎大佐（21期）
第十師団通信隊、同衛生隊、同第二～第四野戦病院

第十師団の長瀬支隊（長瀬武平少将指揮の歩兵約四個大隊半、野砲兵二個大隊基幹）は、二月十七日から済寧方面の敵に対し反撃を開始し、敵を逐次撃破して、二月二十六日には大運河を越えて嘉祥を占領し、同地一帯の掃討を実施したのち、主力を済寧に集結した。

第五師団は片野支隊（歩兵第二十一連隊長の指揮する歩兵約一個大隊半、山砲兵一個中隊基幹）を沂州方向に派遣した。同支隊主力（自動車輸送）は二月二十一日莒県を出発して招賢鎮に到着し、同日午後には莒県北方地区の敵を撃破した。同支隊は二十二日から莒県城の攻撃を開始し、頑強に抵抗する敵を撃破して、二十三日午前中に莒県城を完全に占領した。

第五師団長は二月二十三日、片野支隊を歩兵第二十一旅団長坂本少将の指揮下に入れて坂本支隊とした。坂本支隊の兵力は逐次増加され、歩兵第十一連隊（約一個大隊欠）、歩兵第二十一連隊（一部欠）、歩兵第四十二連隊の一個大隊、野砲兵第五連隊主力（二個大隊基幹）、山砲兵一個中隊を基幹とするものとなった。

坂本支隊は所在の敵を撃破しつつ南下し、三月五日湯頭鎮を占領し沂州方面に向かう準備をした。

**第十師団の南進命令**

当時、第二軍正面に活動しつつある敵は約十一個師（中央軍三、山東軍三、四川軍四、雑軍一）と判断され、その約五個師は三月中旬を期して津浦線方面から第十師団方面に攻撃に転ずるとの情報があった。三月八日、第二軍司令官は軍参謀鵜澤中佐を第十師団長（在袞州）のもとに派遣し、軍司令官の希望なりとして「滕県付近の占領と大平邑（平邑集、袞州東北東七十五キロ）を確保すべき」ことを伝達した。

**注**　右は軍司令官の希望で命令としてではない。

第十師団長は三月八日、左記師団命令をもって、瀬谷支隊（編成後述）の南下を下令した。

支隊長瀬谷啓少将は三月一日の定期異動で、歩兵第三十三旅団長田嶋少将の後任として、三月八日袞州に到着したばかりであった。

十師作命甲第一一九号（三月八日午後八時）

一　密電ニ依レハ津浦沿線方面ニ於ケル数個師団ノ敵ハ近ク我ニ向ヒ攻撃ヲ企図シアルモノノ如シ

二　師団ハ津浦線方面ノ敵ノ攻勢ニ対シ機ヲ見テ主トシテ瀬谷支隊ヲ以テ之ヲ殲滅セントス

三　瀬谷支隊ハ適時津浦線沿線ノ敵ヲ撃滅シテ先ツ界河付近ニ進出スヘシ　主力ヲ以テスル攻撃ノ為ノ前進ノ時期ハ認可ヲ受クヘシ〔以下略〕

**十師作命甲第一一九号ニ関スル参謀長指示**

一　瀬谷支隊主力ヲ以テスル攻撃ニ際シテハ先ツ界河付近ニ進出スヘキモ爾後其当時ノ状況ニ依リ一挙

滕県南方地区迄追撃セシメラルルコトアルヲ予期セラレ度〔以下略〕

右の参謀長指示後、三月十三日に至り、第十師団長は臨（林）城までの追撃意図を示した。

中支那派遣軍参謀長は三月八日、大本営に対し「第十師団前面の李宗仁軍が逐次増加し、第十三師団〔蚌埠地区所在〕前面の敵も日本軍の出撃なしと見て北方に増加しつつあるをもって、派遣軍は北支那方面に策応する必要がある。作戦後は旧位置に復帰するので、徐州攻略を考慮せられたい」旨の意見具申をした。

大本営は、対ソ、対支作戦の見地から、差し当たり大本営は不拡大方針の変更のない旨を返電した。

**北支那方面軍命令**

大本営は三月十日大陸命第七十五号（既述）を発令したが、同日方面軍は左記命令（抜粋）を発令した。本命令には、第二軍の南進に関しては全く触れられていない。

**方軍作命甲第二四四号**

北支那方面軍命令　　三月十日正午於北京方面軍司令部

一　各兵団ノ健闘ニ依リ黄河以北ノ敵軍主力ハ殆ト潰滅ニ瀕シ北支ノ斟定略々成レリ

二　方面軍ハ速ニ占拠地域ノ治安ヲ粛清スルト共ニ主トシテ航空兵力ヲ以テ敵ニ対スル制圧加重ノ歩ヲ進メ旁々戦力充実更張ニ勉メントス

三　第一、第二軍ハ各々其作戦地域ニ於ケル残敵ヲ剿滅若クハ処理シ且速ニ地方ニ於ケル自衛排共ノ組織ヲ充実セシメ治安粛清ノ基礎ヲ確立スヘシ

四　第百十四師団及支那駐屯兵団ハ前任務ヲ続行スヘシ

五　臨時航空兵団ハ主力ヲ以テ敵航空兵力ノ撃滅及後方攻撃ニ任スルノ外一部ヲ以テ前項部隊ト直接緊密ニ協同セシムヘシ

六　第一、第二軍ノ作戦地境及方面軍直轄管区　別紙要図ノ如シ〔要図略、後述注参照〕

七　各兵団担任地区ニ於ケル治安粛清根基確立ノ時期ハ概ネ本年六月末ヲ目途トス

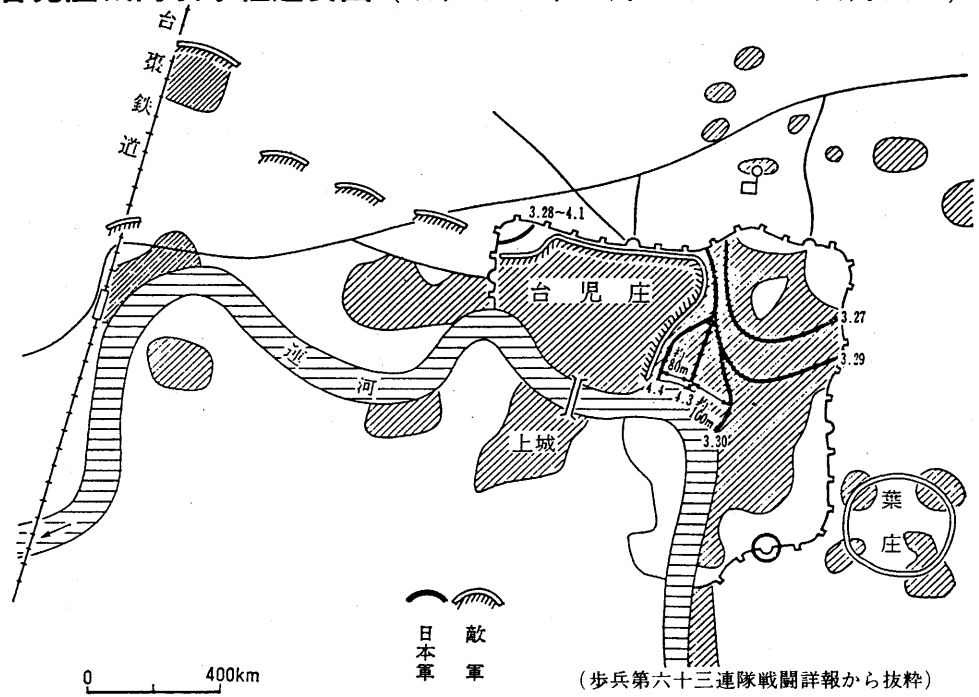
八　第一、第二軍司令官、第百十四師団長及支那駐屯兵団長ハ任務達成上所要ニ応シ其担任地区内ニアル指揮下若クハ隷下部隊以外軍隊（飛行隊及憲兵隊ヲ除ク）竝支那武装団体（特ニ示サレタルモノヲ除ク）ヲ区処スヘシ

方面軍直轄管区と第一、第二軍の境界は阜平（北京南西二百キロ）―新楽（阜平南東七十キロ）―饒陽（新楽東方七十キロ）―武邑（饒陽南々東四十五キロ）―安陵（武邑東方五十キロ）以東の河北、山東省の線。第一、第三軍の作戦地境は饒陽―深県（饒陽南方二十五キロ）―廬花鎮（深県南方七十五キロ）―臨清―東昌―張秋鎮を連ねる線。

## 第二軍の南進命令

第二軍は三月上旬、方面軍を通じて大本営に対し、「眼前の敵を追い払わしてくれ、決して深く南進する作戦ではない。後方警備のため兵力増加をしてほしい」旨を申請した。これに対し、大本営内で反対もあったが、結局は第二軍の言を信頼して一部の部隊を増加し、第二軍の掃討作戦を認可した。この認可は従来慎重であった作戦課長河邊大佐に代わって、三月一日陸軍省軍事課高級課員稲田正純中佐が作戦課長に就任したことも有力な一因であった。

# 台児庄城内攻撃経過要図（昭和十三年三月二十七日～四月四日）




（歩兵第六十三連隊戦闘詳報から抜粋）

第二軍は三月十三日、第十師団に対し、大運河以北の敵撃滅を、第五師団に対し、一部をもって沂州占領後、嶧県付近に進出して第十師団の作戦に協力すべきことを命じた。第二軍の企図は、右目的達成後においてはおおむね滕県、沂州の線において爾後の作戦を準備するというものであった。

かくして中央の不拡大方針の二角は崩れた。

**瀬谷支隊の南進**

瀬谷支隊は三月十四日払暁、両下店付近から作戦を発起し、所在の敵を撃破して十五日夕には滕県付近に達した。支隊の編成は次のとおりである。

歩兵第三十三旅団司令部、歩兵第十連隊(約一個大隊半欠)、歩兵第六十三連隊、独立機関銃第十大隊、独立軽装甲車第十、第十二中隊、野砲兵第十連隊(一個大隊と二個中隊欠)、臨時野砲兵中隊(九十野砲)、臨時編成山砲兵中隊、野戦重砲兵第二連隊(一個大隊、連隊段列半部欠)、支那駐屯砲兵連隊第三大隊(十五榴二個中隊)、工兵第十連隊第一中隊、師団通信隊の一部、師団衛生隊、師団第一野戦病院、兵站自動車第十五中隊

右のほか、野戦重砲兵第一旅団長以下の指揮機関の一部と師団参謀逆瀬川幸男大尉(36期)が配属された。

(注) 歩兵第十、第六十三、第百五十連隊などを「歩一〇」、「歩六三」、「歩一五〇」などと略記することがある。

瀬谷支隊長は歩一〇基幹部隊をもって滕県付近の敵を攻撃させ、歩六三基幹部隊を滕県南方に南下させた。

歩一〇基幹部隊は三月十六日早朝から攻撃を開始したが、予想外の頑強な抵抗に遭い、十八日午後滕県城を完全占領した。敵は第四一軍（四川軍）の第一二二師、第一二四師の約七千名であった。

歩六三基幹部隊は三月十六日、南沙河地区の有力な敵を撃破し、十七日夕、臨城を占領した。

十八日、瀬谷支隊長は師団命令に基づき、歩六三の第一大隊（一個中隊欠）基幹を右追撃隊として韓荘（韓庄）に向かい、歩六三の第二大隊基幹を左追撃隊として嶧県に向かい追撃させ、支隊主力を臨城付近に集結させた。

右追撃隊は敵を撃破南進して二十日韓荘を占領し、左追撃隊は二十日未明、嶧県を占領した。嶧県占領の目的は、同地北方棗荘付近の炭田確保と第五師団の作戦を容易にすることにあった。

**瀬谷支隊の台児庄進出**

三月十九日、第二軍参謀岡本清福大佐は沂州に出張し、第十師団長に対し、第五師団の坂本支隊の状況（南下困難）を伝え、第十師団方面から坂本支隊を支援することを示唆した。

第十師団長は二十日、瀬谷支隊長に対し、「韓荘、台児庄運河ノ線を確保シ臨城、嶧県ヲ警備スルト共ニナルヘク多クノ兵力ヲ以テ沂州方面ニ突進シ第五師団ノ戦闘ニ協力」すべきことを命じた。瀬谷支隊長は二十一日、歩兵第六十三連隊長に左記命令（抜粋）をもって嶧県付近進出を命じた。

歩六三（第一、第二大隊、一中隊ヲ欠キ野砲兵第十連隊第二大隊〈二中欠〉ヲ属ス）ハ明日臨城出発嶧県ニ向ヒ前進シ左追撃隊ヲ併セ指揮シ台児庄及蘭陵鎮方向ノ敵情地形ヲ捜索スヘシ

歩六三主力は二十二日〇七〇〇臨城地区を出発し、同日一七三〇ころ嶧県に到着して左追撃隊を掌握し

た。

瀬谷支隊長は二十二日一〇〇〇、次の命令（要旨）を下達し、台児庄派遣と沂州方面派遣を命じた。

一　右追撃隊は韓荘守備隊となり、韓荘付近を守備。

二　台児庄派遣隊（歩六三の第二大隊、野砲一個大隊基幹）は明二十三日嶧県出発、台児庄付近運河の線を確保。

三　沂州支隊（歩一〇主力基幹）は明二十三日臨城を出発、沂州方面に前進し、坂本支隊の作戦に策応。

四　瀬谷支隊主力を嶧県付近に集結。

しかし、瀬谷支隊長は同日午後、「微山湖に約千二百五十隻の船団所在、夏鎮（臨城西北西十キロ）に敵侵入」の情報（飛行機偵察）を受け、沂州支隊の派遣と主力の嶧県集結を中止し、二十三日主力をもって臨城西方地区を掃討した。夏鎮方面に有力な敵は所在しなかった。

台児庄派遣隊は二十三日朝、嶧県を出発、主として台棗線（棗荘―台児庄鉄道）に沿う地区を南下し、所在の敵を撃破して同日夜には北洛（台児庄北西七キロ）付近に達した。

このころ、瀬谷支隊長は次のごとき情報を得た。

一　嶧県周辺に敵第二〇軍（湯恩伯）の第三八軍（第四、第八九師）が所在し、嶧県東方注区には第五二軍（第二、第二五師）が進出しつつあり。

二　第五戦区総司令長官李宗仁は湯恩伯軍に対し、嶧県の北東方及び北方高地に集結し、二十四日攻撃前進を開始して、日本軍を韓荘、臨城間において微山湖に圧迫殲滅すべきことを命令せりと。湯恩伯

は二十二日夜向城に所在。

瀬谷支隊長は右の情報などを考え、二十三日夜、次の命令（要旨）を下達した。

一　支隊は一部を沂州方向に派遣して坂本支隊に策応させ、主力は韓荘及び台児庄付近の大運河の線を確保。

二　沂州支隊（歩一〇の第二大隊基幹）は二十四日臨城出発、沂州方向に前進して坂本支隊の作戦に策応。

三　歩一〇（第二大隊等を欠き、砲兵等属す）は一部をもって韓荘付近の大運河の線を確保、主力は臨城に集結。

四　歩六三（一個大隊を欠き、砲兵等属す）は一部をもって台児庄付近の大運河の線を確保、主力は嶧県に集結。

五　支隊司令部及び直轄部隊は棗荘付近に集結。

**坂本支隊の南下困難**

第五師団の坂本支隊は三月五日湯頭鎮を攻略し、沂州方面進出を企図したが、優勢な敵の反撃などにより、戦況は迅速に進展しなかった。

この方面の敵は、当初は第三九師（龐炳勛）、海軍陸戦隊（沈鴻烈指揮）を主とするものであったが、三月十二日ころには第五九軍長張自忠の指揮する第三八師、第一八〇師も沂州付近に到着して強力なものとなった。

坂本支隊は三月二十二日から沂州北東方及び東方の敵を攻撃して撃破し、二十五日朝から主力をもって沂州東側の沂河東岸敵陣地の攻撃を開始した。この時、費県方面から一部の敵南下の情報を受け、支隊長はこの敵を撃破するため、歩兵第二十一連隊主力を基幹とする部隊に義堂集方面への転進を命令した。同部隊は二十五日夜転進を開始し、二十六日正午ころ義堂集を占領して警戒に任じた。

次いで、坂本支隊長は主力を沂州北西方に転移させ、二十七日から沂州攻撃を開始し、沂州周辺の敵占領部落を逐次攻略したが、敵の抵抗は頑強で、二十九日になっても沂州県城の攻略はできなかった。

一方、坂本支隊の作戦に策応する瀬谷支隊の沂州支隊主力は、二十四日夕郭里集に到着したが、二十五日未明から敵の包囲攻撃を受け、激戦ののち撃退した。同日未明、棗荘炭鉱も敵の攻撃を受けたが撃退した。郭里集方面の敵は四個師との情報であった。

また、同日韓荘にも敵約二千が来攻したが撃退した。

### 台児庄方面の戦局激化

台児庄派遣隊（歩六三第二大隊基幹）は三月二十四日南下を続け、同日夕刻には一部をもって台児庄城壁の北東角に突入したが、逆襲を受けて不成功となった。派遣隊は弾薬も欠乏したため、攻撃を中止し、台児庄北側で爾後の攻撃を準備した。

瀬谷支隊長は二十五日棗荘に前進し、沂州支隊方面の情勢を憂慮して同夜「支隊は、台児庄は目下の兵力をもって監視と砲兵制圧にとどめ、主力をもって郭里集付近の敵と決戦を企図する」旨を発令し、歩一〇主力（約一個大隊半の兵力）を臨城から棗荘南方に進出させた。

台児庄派遣隊は二十五日、逐次増大する敵の包囲攻撃を撃退しつつあったが、同日夕刻に歩兵約二個中隊、重砲二門の増援と弾薬の補充を受けた。二十六日も優勢な敵の包囲下で、二十七日からの攻撃を準備した。

台児庄派遣隊は二十六日〇二〇〇ころ、次の内容の電報を発した。

一　敵兵力は三個師（城内一、城東一、城西及び包囲一）、城内及び停車場付近に列車砲あり

二　派遣隊は増援を待ち二十七日攻撃開始

三　戦死約二十、負傷百十二、城内突入生死不明十五

二十六日、郭里集付近の敵主力は南西方に退却したため、瀬谷支隊長は郭里集―嶧県にわたる東側地区要点を占領警戒させ、歩兵第六十三連隊長福榮大佐の指揮する台児庄攻略部隊（歩兵約一個大隊基幹）の派遣を下令した。

台児庄方面の状況を憂慮した第十師団長は二十六日、瀬谷支隊長に対し、果敢な攻勢を要求した。

台児庄派遣隊は二十七日朝から台児庄の攻撃を開始し、〇七五〇北東角を占領したが、敵の頑強な抵抗と包囲攻撃（東、北、西の三方）を受け苦戦を続けた。

福榮大佐の指揮する台児庄攻略部隊主力は二十七日〇八〇〇嶧県を出発、所在の敵を撃破南下し、福榮大佐は同日一七二〇劉家湖（台児庄北方二キロ）に到着して台児庄派遣隊を掌握した。そして翌日の攻撃を部署した。

瀬谷支隊長は二十七日朝、支隊主力をもってする台児庄攻略を下令したが、同夜これを中止し、歩一〇

主力等をもって郭里集北東方の敵を攻撃することを下令した。

台児庄攻略部隊は、三月二十八日早朝から台児庄攻撃を開始した。同隊の兵力は逐次増加され、戦闘部隊の概要は次のとおりとなった。

歩兵第六十三連隊(約二個大隊)、独立機関銃第十大隊、軽装甲車第十中隊、支那駐屯戦車隊の臨時戦車中隊(中戦車七、軽装甲車五)、野砲兵第十連隊第一大隊(第一中隊欠)、野戦重砲兵第二連隊(第二大隊欠)、支那駐屯砲兵連隊の一個小隊(十五糎榴弾砲二)、工兵第十連隊第一中隊の一個小隊

台児庄の抵抗は依然頑強で、二十八日〇七三〇ころ、台児庄の北西角の一部も占領したが、東方及び北東方からの敵の攻撃と有力な敵砲兵(二四～二五門)の砲撃により、戦果拡張は困難であった。二十九日も同様の状況であった。

### 瀬谷支隊主力の台児庄攻撃

三月二十九日、第十師団長は、瀬谷支隊長に対し、主力をもって速やかに台児庄付近の敵を撃破すべきことを命令した。

瀬谷支隊主力(歩一〇基幹)は三十日早朝、嶧県付近から南下し、所在の敵を撃破して先頭部隊は二一三〇には台児庄西方六キロの范口付近に達した。この方面の敵は第五、第六、第三〇師に属する四個隊であった。

台児庄攻略部隊は頑強な敵を排除して三月三十日夕刻、台児庄東半部を攻略し、大運河に達した。

瀬谷支隊長は三十日夜、「沂州方向から退却した張自忠軍の約二個師が嶧県東方地区に停止」の情報によ

り、歩一〇主力を獐山（嶧県南東九キロ）東側に集結させ、この方面の敵の攻撃を命じた。獐山は三十一日未明、敵約八〇〇の攻撃を受けたが、同地守備隊は奮戦撃退した。

三十一日、台児庄の攻撃は進展を見なかった。

瀬谷支隊長は北方の敵を顧慮し四月一日、歩一〇主力に北方の敵を北東方に圧迫攻撃することを命じた。歩一〇主力は一日、北洛から北東方に攻撃前進した。同正面の敵は、わが前進に伴い逐次退却し、歩一〇主力は一六〇〇ころ低石橋（台児庄北東六キロ）に進出した。この日、歩兵第三十九連隊第一大隊（三個中隊と機関銃一個小隊欠）が歩兵第十連隊長に配属された。

台児庄攻略は依然として進展せず、福榮大佐は台児庄北西角を占領していた一部を、四月一日夜撤退させて、攻撃力を台児庄東部に集中した。

### 坂本支隊の台児庄方面進出

第五師団の坂本支隊は三月二十九日、沂州攻撃を続行しつつあった。

第二軍は二十九日、瀬谷支隊方面の戦況が急迫したため、第五師団に瀬谷支隊の救援を命じた。第五師団は坂本支隊に対し、沂州攻撃を一時中止して、瀬谷支隊を救援することを命じた。

坂本支隊長は歩兵約二大隊を沂州付近に残置し、主力（歩兵四個大隊、野砲二個大隊基幹）を二十九日夜戦線から撤収させて南下し、五月一日蘭陵鎮（台児庄北々東二十五キロ）に進出した。次いで支隊は四月二日、台児庄東方五～六キロの地区に進出して瀬谷支隊と連係し、台児庄東方地区の敵を攻撃した。第五師団長は三月三十二日、湯頭鎮に進出して作戦を指揮した。

四月二日、台児庄攻略は依然進展しなかったが、歩一〇主力は台児庄東方地区に向かい南下し、激戦のち、一八〇〇ころ辺庄（台児庄東北東二キロ）に達した。「歩兵第十連隊戦闘詳報」は二日の戦闘を次のごとく記述している。

敵ハ第二十七師団第八十隊ニシテ昨日来ノ戦闘振リヲ検討スルニ流石蔣介石ノ信任厚カリシタケニ決死勇戦ノ状歴然タリ散兵壕ヲ狭シト折リ重リ枕ヲ並ヘテ討死セル様敵ナカラ天晴レト見ル者ヲシテ感嘆セシム　通訳ヲシテ降伏ヲ勧告スルモ応スルモノナシ　屍山血河ハ独リ日本軍特有ノモノニ非ス他ヲ識ラスシテ徒ラニ自己陶酔ニ晏如タルハ国軍ノ為最モ戒慎ヲ要スヘシ　此日〔二日〕ニ於ケル我損害死傷将校以下六十六名ニシテ敵ノ遺棄死体ハ二百五十ヲ下ラス

四月三日、台児庄攻略部隊は城内において、約一〇〇米進出し、東南門も占領した。歩一〇主力は大運河河畔の黄林庄（台児庄南東一キロ）に進出した。

坂本支隊は三日、火石埠（台児庄東南東五キロ）から蕭汪（台児庄東方八キロ）方面の敵を攻撃して激戦した。

四日、台児庄城内の抵抗は依然頑強で、わが戦線は約八〇米を推進したのみであった。瀬谷支隊長は歩一〇の約一個中隊を黄林庄に残置し、歩一〇主力を四日夜、魚鱗（台児庄北西四キロ）付近に転進集結させて、台児庄西方地区の敵に対して警戒させた。

### 両支隊の台児庄方面離脱

四月四日、坂本支隊は蕭汪付近で優勢な敵の包囲攻撃を受け苦戦中であった。この日、坂本支隊は第五

台児庄突入の日本軍

師団長から「支隊は速やかに当面の敵を撃滅したのち、沂州攻略のため転進すべき」旨の命令を受けた。当時、第五師団長は通信連絡の不良から、坂本支隊の作戦は有利に進展中と判断していた。

しかし、坂本支隊は依然苦戦を続けており、後方は遮断され第五師団からの補給は困難となり、五日には第十師団から弾薬、糧食の補充を受ける状況であった。

五日、台児庄城内の攻撃は進展なく、魚鱗付近に集結した歩一〇主力は各一部をもって頓庄閘（台児庄西方八キロ、歩一〇の一個中隊守備）の戦闘支援及び台児庄西方三キロ付近の敵を攻撃した。

坂本支隊長は五日、瀬谷支隊の台児庄攻略は完了し、瀬谷支隊の作戦に策応する任務は達成したと考え、同日一九三七、歩二一に対して反転準備を下令し、二〇三〇瀬谷支隊長に対し、「支隊は沂州攻略ノ為反転ヲ命セラレ明六日日没後行動ヲ開始シ七日払

暁迄ニ三仏楼〔台児庄北北西六キロ〕付近ニ兵力集結ノ予定」と電報した。また、同夜（時刻不明）、「支隊は沂州反転を命ぜられたるも敵に一撃を与えたし、瀬谷支隊は当支隊北方の敵背後を攻撃せられたい」旨を電報した。

瀬谷支隊長は坂本支隊長に対し「如何ナル時機ニ反転ヲ開始セラルル予定ナリヤ至急承知致シ度」と電報した。本電の発電時刻不明であるが、坂本支隊は六日〇八五六受領している。

坂本支隊長は六日〇八三〇ころ（推定）、第五師団長及び瀬谷支隊長あてに、「当面の敵を撃破するを目下の急務とするため、沂州反転は十日ころと判断せらる」旨を電報した。瀬谷支隊長が本電を受領したかは、不明である。瀬谷支隊長（四月三日から台児庄北方五キロの楊廟に位置す）は六日朝までに概要左記の情報を得た。

一　坂本支隊は台児庄東方地区で約二個師と交戦中。

二　五日夕、韓荘南方四キロの地点を五千～六千の敵東進。

三　泥溝、獐山付近に五百～六百の敵所在。

四　約半個師の敵は楊家廟北東五～八キロ地区に進出。

瀬谷支隊長は六日〇七一〇次のごとく命令した。

一　歩六三主力は速やかに台児庄の掃討を完了。

二　歩六三の第一大隊（二個中隊欠）は本払暁までに潘墜（楊家廟南東二キロ）に集結し、楊家廟北東地区の敵を攻撃し、坂本支隊に協力するとともに左側援護。

三　歩一〇主力は魚鱗地区に集結し、西方への攻撃を準備。

四　歩三九の第一大隊は獐山付近を占領。

瀬谷支隊長は六日一五〇〇ころまでに状況を知り、一五三〇、本日没後支隊主力を北方に転進させて、坂本支隊右側背の敵を攻撃することを下令した。

命令の要旨は次のとおりである。

一　坂本支隊は六日朝主力をもって台児庄東方地区、歩二一の一部をもって堡子―朱庄地区で東西に面し悪戦中、坂本支隊騎兵隊は向城にて敵第二師と交戦中、坂本支隊は依然現在地付近で攻撃を続行する。歩六三第一大隊及び野砲兵第二大隊主力は支隊背後に西進中の敵を撃破し、現在河湾から馬庄方向に攻撃中。

二　支隊は本日没後全力をもって北方に転進し坂本支隊の右側背を脅威しつつある敵を撃滅する。

三　歩一〇の第一大隊は日没とともに南洛付近を出発、白山西（泥溝西方九キロ）を占領し右側を援護せよ。

四　歩三九の第一大隊長（歩兵約二個中隊、機関銃三個小隊、野砲兵第十連隊第四大隊〈二個中隊欠〉等を指揮）は獐山を占領しあり、右側を援護せよ。

五　歩六三長は日没直後連隊主力（台児庄城内部隊を除く）、野砲兵第十連隊主力（四個中隊）を指揮し朱庄に向かい攻撃し、歩二一を救援したのち、同連隊と協力して餓虎橋付近の敵を撃破せよ。

六　台児庄城内部隊は歩六三の第二大隊長の指揮をもって日没後集合し、泥溝に向かい前進せよ。

七　頓庄閘、挿花溝、黄林庄の部隊は二十時第一線を撤して南洛に前進せよ。歩一〇長は前項部隊及び指揮下部隊を指揮して泥溝に前進せよ。

八　その他部隊は泥溝に集結せよ。支隊長は二十一時北洛に、二十四時以後は泥溝に位置する。

第十師団長は六日、坂本支隊の転進決心を知り、第二軍に対し、総合兵力をもって台児庄付近の敵を撃滅すべきことを意見具申して軍の同意を得た。ところが、その後になって、瀬谷支隊から「一時台児庄を離脱し後方に兵力集結を企図する」旨の報告を受け、師団長は瀬谷支隊に対し、直ちに転進中止を命令し、参謀長にこの旨を電話させた。

しかし、瀬谷支隊長は全般状況を判断し、台児庄から支隊を転進させた。支隊は混乱なく敵と離脱したが、輸送困難な集積物資の一部を焼却する状況を生じた。

歩六三長は六日夜、台児庄戦線を離脱した主力を指揮し、先に北進した第一大隊方面に前進して七日朝、河湾付近に進出した。次いで北東方に攻撃前進し、頑強な敵を撃破して晁村、底閣付近に進出して、一六〇〇ころ歩二一と連絡をとげた。歩六三は瀬谷支隊長の指示に基づき、二四〇〇ころ官庄（台児庄北方十二キロ）に集結した。

坂本支隊長は瀬谷支隊の離脱を知り、支隊の撤退を決意し、七日夜敵の近迫下に戦線を離脱して、八日朝には嶧県北東方地区に転進した。

坂本支隊配属の第五師団参謀奥信夫少佐（31期）は八日（発電は九日一五〇〇）、第五師団参謀長あてに次の電報を発している。

瀬谷支隊トノ連絡ハ軍無線ナキ為極メテ困難　反転ニ関シ四月五日午後八時三十分発信坂作報第二四四号ヲ以テ「三仏楼付近ニ兵力ヲ集結ノ予定ナル旨」通報シタル所　板参甲第三〇一号〔第五師団電報〕ニヨリ更ニ坂作報第二四五号ヲ以テ「支隊ハ沂州ヘ反転ヲ命セラレタルモ当面ノ敵ニ一撃ヲ与ヘタキ旨」通報シ支隊トシテハ緊密ニ瀬谷支隊ニ連絡セシモ六日夜ニ至リ瀬谷支隊ハ何等連絡ナク泥溝ニ後退ニ関シ何等意志表示ナク遺憾此上ナシ　昨七日夜ノ反転ハ近迫セル敵銃砲火ノ下ニ実行セリ　八日払暁瀬谷支隊副官来リ万事連絡不十分ノ原因判明ス　後刻詳報ス　奥参謀

（筆者注）瀬谷、坂本両支隊の撤退はその後（戦後も）問題となった。筆者は瀬谷支隊が坂本支隊に連絡なく後退した真相究明に努めたが、判然としない。前記奥参謀の電報から、通信連絡の不十分が最大原因であることは推定されるが指揮系統にも問題がある。同一方面に作戦する両支隊が、遠方の第十師団長（沂州百二十キロ）、第五師団長（湯頭鎮百十キロ）からそれぞれ指揮され、しかも、両支隊間の通信機関は不備である。軍はようやく四月八日、坂本支隊を第十師団長の指揮下に入れて指揮の統一を図った。

**坂本支隊を第十師団長に配属**

第二軍は八日正午、坂本支隊を第十師団長の指揮下に入れ、同師団長に対し、「敵の攻撃を撃砕し、後続部隊の来着とともに当面の敵を撃破しておおむね禹王山（台児庄南東八キロ）、四戸鎮（台児庄北東二十五キロ）に窮追する」企図を示した。これより先の四月三日、北支那方面軍は大本営から、徐州会戦実施の内定電報を受けていた。

第十師団長は八日、通信不良のため、坂本支隊の状況は不明であったが、両支隊に対し「現在地付近に極力兵力を整頓し、敵情を捜索し、爾後の攻撃を準備すべき」ことを命じた。八日、瀬谷支隊は嶧県周辺地区に部隊を集結中であり、坂本支隊は康里集南方地区で部隊を整理中であった。

なお、第二軍は軍参謀小沼治夫中佐を坂本支隊配属のため、第十師団長に配属した。小沼参謀（32期）は八日夜半、兗州に到着し、師団長から坂本支隊配属の命を受け、九日坂本支隊に到着した。

### 中国側の戦勝宣伝

中国側は、日本軍が新方針に基づき、占拠地域の確保安定の態勢に移行したのを見て、戦力を消耗して攻撃作戦の余力がないと判断していた。このとき、台児庄における頑強な抵抗、そして日本軍の後退は「台児庄の勝利」として大きく宣伝された。

中国は、日本軍殲滅を内外に宣伝し、軍の士気を高め、民衆の結束を固めて戦意を向上させた。これにより、列国の援蔣政策を積極化させるおそれがあった。

郭沫若（当時、国民政府政治部第三庁〈宣伝〉庁長）の「抗日回想録」（抗日戦の記録―竹内好編―平凡社発行）中に次の記事がある。

思えば、これも運というものか。宣伝週がはじまって三日目、台児庄の大勝利にぶつかった。当時の軍事ニュースは次のように伝えていた。

台児庄当面の敵は、六日夜のわが軍の総攻撃によって、挟撃された。敵は天険によって頑強に抵抗したが、今朝三時に至って弾薬尽き、全線動揺した。わが軍は志気ますます上がり、勝に乗じて追撃、ま

た追撃し敵を一挙に殲滅、かくて空前の大勝利を得た。この戦闘における敵の死傷二万余人、歩兵銃一万余挺、重機関銃九百三十一挺、歩兵砲七十七門、戦車四十台、大砲五十余門、捕虜無数。敵板垣・磯谷両師団の主力はすでにわが方のために殲滅された。〔中略〕

今日から見ると、このニュースは噴飯ものだ。事実のところ敵は台児庄一帯から戦略撤退をし、全面的進攻に備えたのだ。それをわが方の〔軍師〕たちが誇大にしたので、それこそまさに「拡大宣伝」だ。これはもともと「軍師」たちの慣用手段だが、それにしても当時は一般人を勝利の陶酔にまきこんでしまった。〔以下略〕

昭和十三年六月、北支那方面軍参謀部第三課が作成した資料によれば、第五師団（二月二十日～五月十日）及び第十師団（三月十四日～五月十二日）の死傷は次のとおりで、比較的大である。

第五師団　戦死一、二八一　戦傷五、四七八

第十師団　戦死一、〇八八　戦傷四、一三七

昭和十三年四月（日時不詳）、蔣介石は宣伝に関し、左記事項を宣伝要綱として指示したようである。

一　台児庄ノ戦闘ハ第二期抗戦ノ当初ノ勝利ニ過ギズ爾今極力該戦勝ニ伴フ驕慢ヲ戒ムベシ

二　長期抗戦ノ主眼ハ敵戦力ヲ消耗セシメ以テ最後ノ勝利ヲ獲得スルニ在リ　一城一都市ノ得失ニアラザルヲ深ク認識シ持久心理ニ悪影響ヲ及ボサザル如ク努ムベシ

三　本党ノ宣言及抗戦建国綱領等重大意義ヲ闡揚スル如ク努ムベシ

四　凡テ宣伝ニ際シテハ事実ノ報道ニ努メ誇張ヲ慎ムベシ

五　敵ニ筆誅ヲ加フル際ハ日本軍閥ニ対スル攻撃ニ止メ絶対ニ日本皇室及日本民族ニ対スル誹謗ヲ報道スベカラズ

右の宣伝要綱において、蔣介石の長期抗戦の心構えと筆誅を日本軍閥を目標とし、日本皇室及び日本民族に対する誹謗を禁止したことは注目すべきであろう。

昭年十三年四月（日時不詳）、第五戦区司令官李宗仁は蔣介石の命に基づき、左記訓令を伝達した。

日本軍ハ山東省南部、山西省中部及江南地区ニ於テ再三惨敗セシ為最近日本国内ニハ政変ノ模様アル外強烈ナル反戦思想ヲ誘起セリ　尚近時対「ソ」関係益々悪化セシ為露満国境ノ日本軍ヲ移動セシムル能ハズ　対支戦線ニ於ケル屢次ニ亙ル敗戦ト共ニ国際的地位ハ日々凋落ノ一途ニアル現況ニ鑑ミ敵ハ遂ニ将来ノ利害ヲモ敢テ顧ズ近ク河北、山西、山東、江南戦線等各地ニ在ル困憊セル兵力ヲ急遽整理補充シ死力ヲ尽シ山東省南部ニ於ケル頽勢ヲ挽回セント企図シアリ

依ッテ我忠勇ナル将士ハ目下敵ハ非常ナル窮境ニアルヲ深ク認識シ全軍協力一致以テ最大ノ戦果ヲ納ムル如ク各々其ノ任務ニ精励シ当面ノ敵ヲ粉砕スルト共ニ残敵ノ掃蕩ニ尽瘁シ民族ノ独立竝ニ抗戦ノ大使命ヲ達成スル如ク努ムベシ

このように呼号して我に反転する態勢を整え、大軍を擁して我に対峙して来たのである。我北支軍はこれに応ずべく改編成して戦闘準備を改定した。

**北支那方面軍戦闘序列改定**

昭和十三年三月三十日大陸命第八十三号により、北支那方面軍、第一軍、第二軍、臨時航空兵団等の戦

闘序列（編成）が改定された。

改定後の大要は次のとおりで、隷属転移は四月五日とされた。

**北支那方面軍戦闘序列大要**

北支那方面軍司令官　陸軍大将　伯爵　寺内壽一

北支那方面軍司令部

第一軍（司令官　陸軍中将　香月清司）

第一軍司令部、第十五師団、第二十師団、第百八師団、第百九師団、独立機関銃第四・第五・第九大隊、独立軽装甲車第一・第五中隊、戦車第二大隊、独立山砲兵第一・第三連隊、野戦重砲兵第二旅団（野戦重砲兵第五・第六連隊基幹）、独立野戦重砲兵第八連隊、迫撃第三・第五大隊、その他略

第二軍（司令官　陸軍中将　西尾壽造）

第二軍司令部、第五師団、第十師団、独立機関銃第六・第十大隊、独立軽装甲車第十・第十二中隊、野戦重砲兵第一旅団（野戦重砲兵第二・第三連隊基幹）、その他

方面軍直轄兵団

第十六師団、第百十四師団、支那駐屯兵団、独立混成第三・第四・第五旅団

臨時航空兵団

その他

右の方面軍直轄兵団は三月三十日現在において、第十六師団、独立混成第三・第四旅団は第一軍に、独

立混成第五旅団は第二軍にそれぞれ配属されている。

臨時航空兵団の編成の大要は次のとおりである。

臨時航空兵団長　陸軍中将　男爵　徳川好敏

航空兵団司令部

第一・第四飛行団司令部

飛行第一大隊（偵察）、飛行第七大隊（偵察）、飛行第二大隊（戦闘）、飛行第五大隊（第二中隊欠）（軽爆）、飛行第九大隊（軽爆）、飛行第六大隊（実爆）、独立飛行第九中隊（戦闘）、独立飛行第三中隊（重爆）

飛行場勤務第一・第二・第三中隊

第一・第二野戦飛行場設定隊

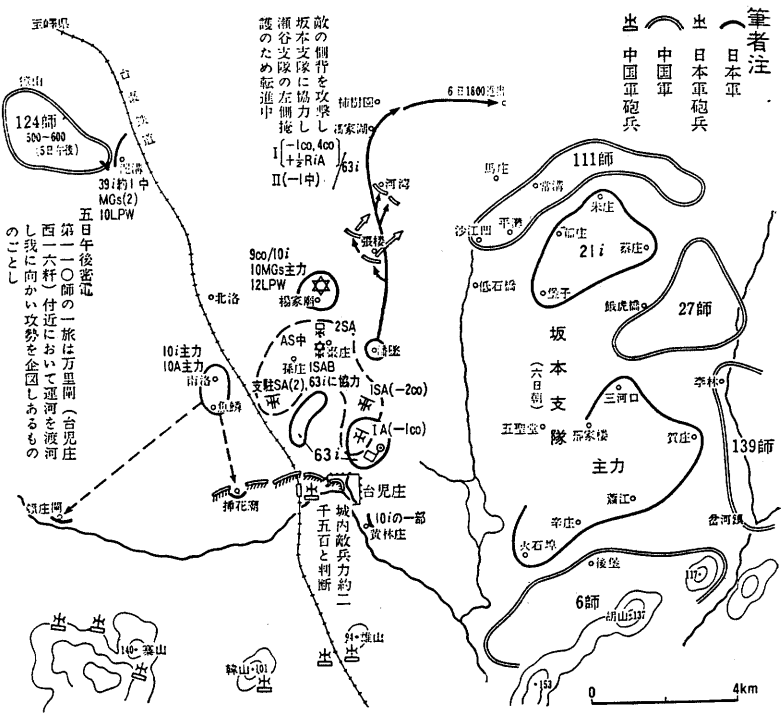
第一師団第九・第十野戦高射砲隊、第五師団第一野戦高射砲隊、第十三師団第一～第三野戦高射砲隊

近衛師団第六野戦照空隊、第三師団第五野戦照空隊

兵站自動車第一・第六十四・第六十五中隊

第二・第四野戦航空廠

第九師団第三～第五陸上輸卒隊

# 四月六日の台児庄付近彼我態勢要図

（歩兵第六十三連隊戦闘詳報から抜粋）